

第 1 部

千崎古墳群第 7 次調査報告



千崎古墳群現地説明会風景

一 熊本県における古墳出土玉類

1. はじめに

千崎古墳群は、熊本県上天草市大矢野町維和千崎3080・3081番地他に所在する。そこは天草諸島の維和島北端にあたり、北に宇土半島を臨む。千崎古墳群では、26基の古墳が確認されており、それらのうち5号墳からは、緑色凝灰岩製の勾玉11点と白玉28点が出土した。また、1955年に行われた第1次調査では、11号墳から玉類12点、13号墳からガラス小玉1点が検出されている（田辺1955 a・1955 b）。

千崎古墳群
の位置千崎古墳群
出土玉類

以下では千崎古墳群の特性と歴史的意義を解明するために、熊本県における古墳出土の玉類を集成し、比較・検討を行った。

(赤尾)

2. 熊本県内古墳出土玉類（第1図、第1・2表）

全国的な傾向として、出土する玉類の種類は時期によって異なることが指摘されている。前期では基本的に、勾玉や管玉、小玉などが多く出土し、その材質としてはヒスイやめのう、ガラスが用いられていることが多い。これは弥生時代からの特徴を受け継いでいると考えられる。中期には、新種の玉類である滑石製白玉、金製空玉、金銅玉、粟玉などが出土するようになる。このような中期における玉類の変化の要因として、大陸系の新たな装身具の招来が指摘されている（石野他編1991）。ただし、新種の玉類の出現後も、以前から存在した勾玉や管玉、丸玉の出土量は減少しない。これらの玉類は古墳時代を通して普遍的に出土している。後期には、中期の傾向を受け継ぎながら、新たに切子玉や平玉などが出現する。また、棗玉や算盤玉が大型化することも指摘されている。しかし、多くの埋葬施設が横穴式石室となり、副葬時期の特定が困難になることや盗掘の可能性が高くなることから、玉類の動向を把握することは難しい。

古墳時代前
期古墳時代中
期古墳時代後
期

以上を踏まえ、熊本県内の古墳で出土した玉類について述べる。

(1) 玉類の材質

まず、玉類の材質について検討を行う。

勾玉の材質としては様々なものが用いられている。一度に出土する勾玉の数が少ない場合、水晶やヒスイ、めのう、硬玉など、入手や加工が比較的困難であると思われる材質で製作されている場合が多い。逆に出土個数が多い場合は、ガラスなど加工が容易な材質が用いられているという傾向がある。九州全体では、硬玉やヒスイ、めのうが勾玉の材質の大半を占め、滑石製の勾玉は福岡市周辺部でわずかに出土しているのみであると報告されている（宇野2008）。しかし、熊本県内出土の勾玉のうち、材質が判明しているものでは、ヒスイやめのうよりもその他の材質で作られた勾玉の方が多い。例として、塩塚古墳（47：番号は第1図、第1・2表に対応する）の水晶製勾玉や、境2号墳（105）のこはく製勾玉が挙げられる。

勾玉

管玉は一度に出土する量に関わらず、碧玉製やガラス製のものが多い。管玉は弥生時代から「碧色」のものが多く、緑や青系統の材質で製作することに何らかの意味をもたせていたと考えられる。熊本県内の古墳で出土した管玉もほとんどが碧玉製あるいはガラス製である。それ以外としては、城ヶ辻7号墳（15）や妻の鼻3号墓（118）で出土した緑色凝灰岩製の管玉、赤田狐谷1号墳（4）や城2号墳（104）で出土した滑石製の管玉が挙げられる。

管玉

小玉や丸玉はガラス製のものが大半を占めている。集成を行った結果、ガラスを用いた玉類

小玉・丸玉

は古墳時代後期に増加する傾向にあった。小玉のガラス以外の材質として、滑石、碧玉、めのうがみられた。ガラス以外を使用した丸玉としては、水晶製のものが2点確認されている。

切子玉 切子玉は、境2号墳でガラス製のものが1点出土している他は、すべて水晶で作られている。水晶は切子玉や算盤玉の材質として用いられる場合が多い。

白玉 白玉は、ほとんどが滑石製である。千崎5号墳(110)における緑色凝灰岩製白玉の出土は、きわめて珍しい事例である。

(2) 玉類の出土傾向

組み合わせ 熊本県で多くみられる玉類の組み合わせは、「勾玉と管玉」、「勾玉と小玉」、「管玉と小玉」である。ただし小玉は単独での出土例も多い。

多量出土 100点以上の玉類が出土した古墳は、熊本県内で9箇所確認されている。ただし、この9箇所の地域的・時期的な偏りはみられない。100点以上出土した玉類の種類は小玉、粟玉、白玉であり、小さな玉類が一度に多く出土する傾向にあるといえる。

他の出土遺物との関係 また、玉類と他の遺物の出土状況を比較すると、ある程度まとまった量の玉類が出土した古墳では、鉄製品や耳環、車輪石など他の副葬品もまとめて出土している場合が多い。逆に、玉類が少量しか出土していない古墳は、他の遺物も少ない傾向にある。この場合は盗掘の可能性を考慮する必要があるかもしれない。

(3) 地域的な分布

玉類が多く出土しているのは、菊池川中・下流域と宇土半島基部地域である。玉類の種類ごとの出土傾向としては、宇土半島基部地域と氷川下流域で勾玉が多くみられるという点が挙げられる。また、水晶製の玉類は、菊池川中流域、白川上・下流域に多いという傾向が指摘できる。こういったわずかな差異はみとめられるが、玉類の数や材質による地域差はそれほど顕著ではない。

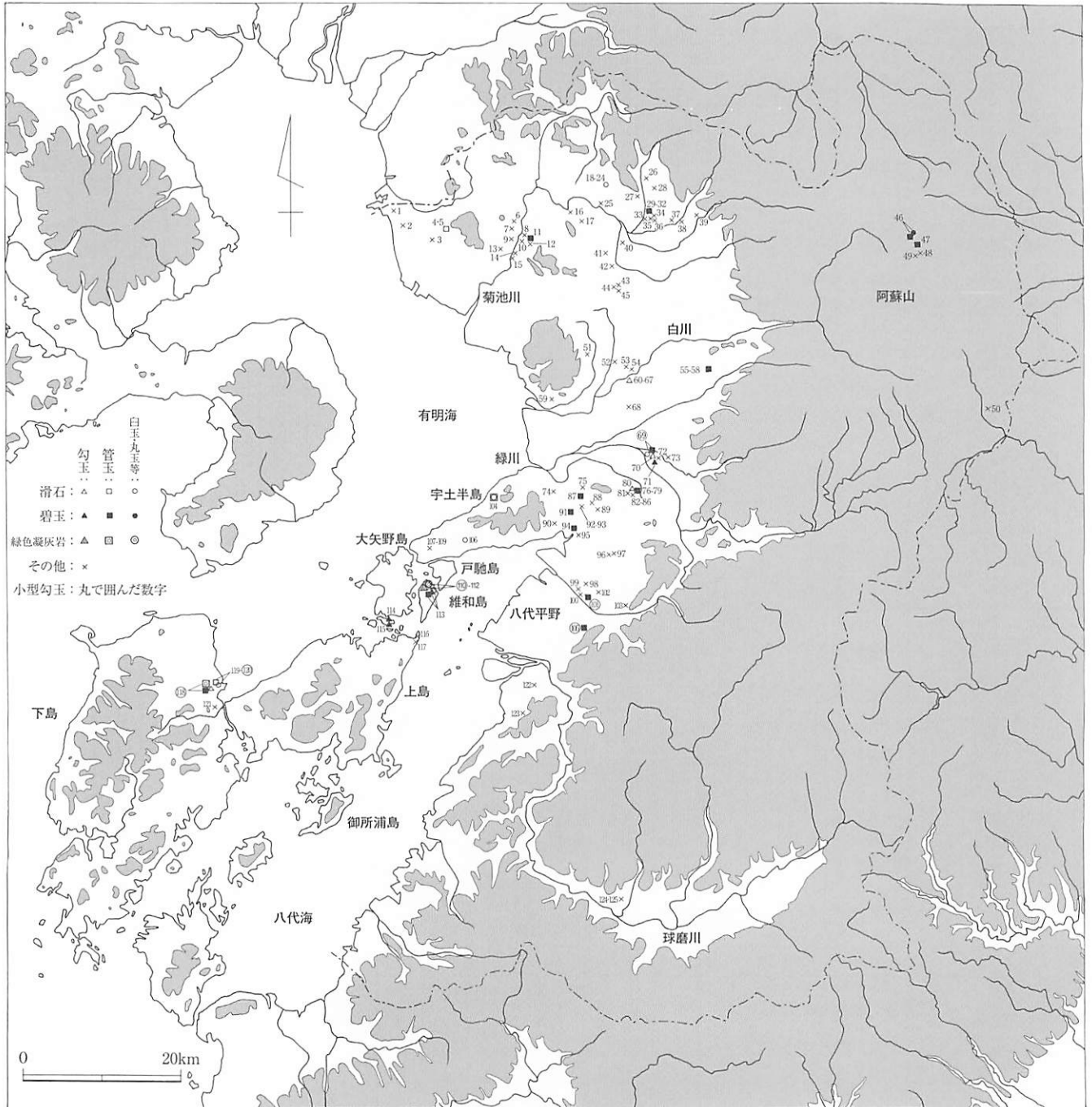
(4) 千崎5号墳出土玉類の特徴

緑色凝灰岩製玉類 千崎5号墳は古墳時代中期前葉から中葉の古墳であると考えられており、この時代の古墳では白玉が出土する例が多いという特徴が挙げられる。前述した通り、千崎5号墳からは緑色凝灰岩製の小型勾玉と白玉が出土している。熊本県内で出土した緑色凝灰岩製玉類はきわめて少ない。千崎5号墳以外で緑色凝灰岩製の玉類が出土しているのは、城ヶ辻7号墳と桐ノ木尾ばね古墳北側石室(113)、妻の鼻3号墓のみである。しかし、これら3箇所出土したのはいずれも管玉であり、緑色凝灰岩製の勾玉や白玉は千崎5号墳以外では確認されていない。また、**小型勾玉** 緑色凝灰岩製の玉類が出土した古墳のうち、3箇所が天草地域であるということも特徴的である。小型の勾玉は、久保遺跡第1号石棺(69)で滑石製のものが19点、物見櫓古墳(101)でガラス製のものが6点、妻の鼻3号墓で滑石製のものが11点、妻の鼻17号墓(120)で滑石製のものが5点出土している。小型勾玉出土古墳は、久保遺跡第1号石棺と物見櫓古墳を除いて、いずれも天草地域に所在している。(赤尾)

3. まとめ

天草地域の特徴 玉類の分布は古墳が集中する地域とほぼ一致するが、天草地域に所在する玉類出土古墳の分布には偏りがみられる。大矢野島とその周辺に分布が集中しており、それ以外の地域では調査があまり行われていないことを考慮しても、玉類の出土が少ないという傾向が挙げられる。

千崎5号墳からは、緑色凝灰岩製の小型勾玉や白玉が出土しており、きわめて特徴的な遺物



第1図 熊本県内玉類出土古墳分布図

(アミ部は標高200m以上を示す。番号は第1・2表に対応する。)

であることが指摘できる。緑色凝灰岩製の玉類は熊本県内の4箇所を確認されているが、千崎5号墳以外で発見されているのはいずれも管玉である。また緑色凝灰岩製の玉類が検出された古墳のうち、千崎5号墳を含めて3箇所が天草地域に所在する点は非常に興味深い。さらに小型勾玉も、2箇所を除いて天草地域の古墳で出土している。よって小型勾玉や緑色凝灰岩を用いた玉類は、天草地域では比較的多く確認されているが、その他の地域ではほとんどみられないこととなる。また玉類の材質と種類の関係について、碧玉はほとんどが管玉に用いられており、滑石は白玉に加工される場合が多いことが指摘できるが、天草地域ではこうした傾向に当てはまらないものが多い。以上の点は当該地域の特徴としてとらえられる可能性がある。(赤尾)

一 熊本県における古墳出土玉類

第1表 熊本県内玉類出土古墳地名表(1)

No.	遺跡名	所在地	墳形	埋葬施設	時期	出土玉類(材質)	備考
1	四ツ山古墳	熊本県荒尾市大島区	円墳	横穴式石室	6世紀末~7世紀初頭	勾玉、丸玉、小玉	装飾古墳
2	野原7号墳	熊本県荒尾市八幡台	—	横穴式石室	6世紀後半	小玉9(ガラス9)、丸玉10(土10)	玄室より出土
3	赤田池2号墳	熊本県荒尾市野原上赤田	—	横穴式石室	7世紀初頭	玉類	
4	赤田狐谷1号墳	熊本県荒尾市野原上狐谷	—	横穴式石室	6世紀末~7世紀初頭	切子玉2、勾玉1、管玉1(滑石1)	
5	赤田狐谷2号墳		—	横穴式石室	6世紀末~7世紀初頭	小玉2	
6	馬出1号墳	熊本県玉名市玉名馬出	—	横穴式石室	6世紀前半	玉類	
7	馬出石棺	熊本県玉名市玉名馬出	—	箱式石棺・舟形石棺	—	玉類	
8	江田穴観音古墳	熊本県玉名郡和木町江田字中小路	円墳	横穴式石室	7世紀前半	勾玉	
9	宮ノ後古墳	熊本県玉名市滑上字宮ノ後	—	舟形石棺	—	小玉	
10	松坂古墳2号石棺	熊本県玉名郡和木町大字瀬川字浦	前方後円墳	箱式石棺	4世紀末	管玉1(碧玉1)、小玉1(碧玉1)	追葬あり
11	江田船山古墳	熊本県玉名郡和木町久保原	前方後円墳	家形石棺	5世紀後半	勾玉5(ガラス2、ヒスイ2、蛇紋岩1)、管玉14(碧玉14)、丸玉3(白ガラス2、水晶1)、小玉68(ガラス68)、こはく玉1、銀製空玉1	
12	塚坊主古墳	熊本県玉名郡菊水町瀬川字清水平	前方後円墳	横穴式石室	6世紀初頭	玉類	装飾古墳
13	大坊古墳	熊本県玉名市玉名大字大坊	前方後円墳	横穴式石室	6世紀前半	玉類	装飾古墳
14	城ヶ辻6号墳	熊本県玉名市寺田字城ヶ辻	円墳	石階系石室	3世紀後半~4世紀前半	小玉22(ガラス22)	玄室より出土
15	城ヶ辻7号墳		円墳	横穴式石室	—	管玉10(緑色凝灰岩1、碧玉9) 小玉3(ガラス3)	玄室より出土
16	横山古墳	熊本県鹿本郡植木町有泉	前方後円墳	横穴式石室	6世紀前半	勾玉3、管玉2、丸玉30、小玉170	装飾古墳 盗掘あり 玄室より出土
17	下米野前畑25号横穴墓	熊本県鹿本郡鹿央町合里字前畑	—	横穴墓	—	管玉	
18	湯の口143号横穴墓		—	横穴墓	—	管玉1(ガラス1)、小玉12(ガラス12)	人骨
19	湯の口102号横穴墓		—	横穴墓	—	白玉55(滑石55)、小玉3(ガラス3)	
20	湯の口138号横穴墓		—	横穴墓	—	小玉1(ガラス1)	
21	湯の口144号横穴墓		—	横穴墓	—	小玉30(ガラス30)	
22	湯の口147号横穴墓		—	横穴墓	—	小玉2(ガラス2)	
23	湯の口113号横穴墓		—	横穴墓	—	小玉1(ガラス1)	
24	湯の口129号横穴墓		—	横穴墓	—	小玉206(ガラス206)、切子玉2(水晶2)、管玉4(水晶1、碧玉2、ガラス1)、算盤玉15(水晶15)	
25	白塚古墳		熊本県山鹿市石臼塚	円墳	横穴式石室	6世紀前半	勾玉2、管玉1、切子玉5、丸玉、小玉
26	徳塚古墳	熊本県鹿本郡菊鹿町下内田山の井	円墳	横穴式石室	6世紀後半	勾玉、切子玉、管玉	
27	津袋大塚古墳	熊本県鹿本郡菊鹿町大字津袋	円墳	長持形石棺	4世紀末	勾玉1、管玉1	
28	竜111号横穴墓	熊本県鹿本郡菊鹿町木野竜ヶ鼻	—	横穴墓	—	勾玉2、玉類1	
29	瀬戸111号横穴墓	熊本県菊池郡七城町台	—	横穴墓	—	勾玉1(めのう1)、白玉3(滑石3)、管玉7(碧玉7)、丸玉1(水晶1)	
30	瀬戸118号横穴墓		—	横穴墓	—	勾玉1(水晶1)、管玉10(碧玉10)、小玉62(ガラス62)	
31	瀬戸1111号横穴墓		—	横穴墓	—	管玉8(碧玉8)、丸玉2(水晶2)、小玉76(ガラス76)	
32	瀬戸1112号横穴墓		—	横穴墓	—	小玉10(ガラス10)	
33	袈裟尾丸山古墳		熊本県菊池郡七城町大字台	円墳	竪穴式石室	—	玉類1(水晶1)、管玉1(碧玉1)
34	うてな1号墳	熊本県菊池郡七城町大字台	円墳	木棺	—	管玉3(碧玉3)、小玉36(ガラス36)	
35	うてな3号墳		円墳	木棺	—	小玉10(ガラス10)	
36	うてな4号墳		円墳	木棺	—	小玉36(ガラス36)	
37	袈裟尾塚古墳		熊本県菊池郡袈裟尾	円墳	横穴式石室	6世紀後半	玉類
38	西迫間横穴墓群	熊本県鹿本郡鹿本町中原	—	横穴墓	—	勾玉、管玉、小玉	
39	袈裟尾茶臼塚古墳	熊本県菊池郡七城町大字台	円墳	横穴式石室	—	管玉8(碧玉8)、切子玉1(水晶1)、算盤玉状玉2(水晶2)、丸玉2(ガラス2)、小玉7(ガラス7)	玄室より出土
40	築地横穴墓群	熊本県菊池市耳築地	—	横穴墓	—	玉類	
41	小野崎遺跡町畑Ⅲ区 ST-01	熊本県菊池市七城町蘇崎	方形周溝墓	粘土郭木棺墓	—	管玉1(土1)、小玉1	
42	加茂(宮穴)20号横穴墓	熊本県鹿本郡植木町豊田宗像	—	横穴墓	—	玉類	
43	石川山6号墳	熊本県鹿本郡植木町石川字塚前	円墳	横穴式石室	5世紀後半	管玉2、小玉23(ガラス23)	石室床面より出土
44	石川山7号墳		円墳	石階系横穴式石室	5世紀後半	小玉137(ガラス137)、勾玉1	擾乱あり
45	石川山8号墳		円墳	石階系横穴式石室	5世紀後半	管玉20	
46	長日塚古墳	熊本県阿蘇郡一ノ宮町字上鞍掛	前方後円墳	竪穴式石室	—	勾玉4(めのう3、ガラス1)、管玉5(碧玉5)、丸玉23(ガラス23)、小玉293(ガラス267、碧玉26)、手玉20(ガラス20)	
47	塚塚古墳	熊本県阿蘇郡一の宮町大字宮地字塚塚	円墳	横穴式石室	6世紀中頃	勾玉1(水晶1)、管玉5(碧玉5)、水晶玉1	玄室より出土
48	御塚A横穴墓	熊本県阿蘇郡阿蘇町大字宮原字前田	—	横穴墓	—	小玉(ガラス)	
49	御塚B横穴墓	熊本県阿蘇郡阿蘇町大字宮原字前田	—	横穴墓	—	小玉(ガラス)	
50	高塚1号横穴墓	熊本県阿蘇郡高森町大字永野原字下塚ノ口	—	横穴墓	—	管玉、小玉(ガラス)	
51	扇田第7号横穴墓	熊本県熊本市百町字扇田	—	横穴墓	6世紀後半	小玉90(ガラス90)	
52	扇田山古墳	熊本県熊本市打越町	円墳	横穴式石室	6世紀後半	玉類	
53	字留毛小頭橋際1号横穴墓	熊本県熊本市黒髪7丁目	—	横穴墓	6世紀末~7世紀初頭	玉類	
54	字留毛小頭橋際4号横穴墓		—	横穴墓	6世紀末~7世紀初頭	玉類	
55	古城6号横穴墓		—	横穴墓	—	勾玉1(めのう1)、切子玉1(水晶1)、小玉62(ガラス62)	
56	古城10号横穴墓	熊本県熊本市古城町	—	横穴墓	—	小玉5(めのう1、ガラス1、不明3)、粟玉2(ガラス2)	
57	古城18号横穴墓		—	横穴墓	—	粟玉11(ガラス11)	
58	古城19号横穴墓		—	横穴墓	—	勾玉2(めのう1、水晶1)、切子玉4(水晶4)、管玉5(碧玉5)、小玉89(めのう6、ガラス83)、粟玉213(ガラス213)	
59	千金甲1号墳	熊本県熊本市小島下町	円墳	横穴式石室	5世紀後半	玉類	装飾古墳
60	つつじヶ丘B-1号横穴墓	熊本県熊本市黒髪7丁目	—	横穴墓	6世紀後半~7世紀初頭	勾玉2(ヒスイ1、水晶1)、丸玉7(ガラス7)、切子玉2(水晶2)	装飾古墳
61	つつじヶ丘C-1号横穴墓		—	横穴墓	7世紀初頭	管玉1(ガラス1)、丸玉15(ガラス15)	装飾古墳
62	つつじヶ丘C-3号横穴墓		—	横穴墓	—	丸玉19(ガラス19)	
63	つつじヶ丘C-5号横穴墓		—	横穴墓	—	丸玉4(ガラス4)	
64	つつじヶ丘C-6号横穴墓		—	横穴墓	—	勾玉1(滑石1)、丸玉52(ガラス52)	
65	つつじヶ丘D-1号横穴墓		—	横穴墓	—	丸玉3(ガラス3)	人骨
66	つつじヶ丘J-1号横穴墓		—	横穴墓	6世紀末~7世紀初頭	丸玉13(ガラス13)、管玉1(碧玉1)	
67	つつじヶ丘J-2号横穴墓		—	横穴墓	—	小玉1(ガラス1)	

第2表 熊本県内玉類出土古墳地名表(2)

No.	遺跡名	所在地	墳形	埋葬施設	時期	出土玉類(材質)	備考
68	上神内7号横穴墓	熊本県上益城郡上益町大字寺中	—	横穴墓	6世紀後半～7世紀	小玉(ガラス)	
69	久保遺跡第1号石棺	熊本県上益城郡嘉島町豊秋	—	箱式石棺	—	小型勾玉19(滑石19)、管玉2(碧玉2)、白玉19(滑石19)	
70	久保遺跡第4号石棺		—	箱式石棺	—	勾玉1(滑石1)	
71	榎山古墳	熊本県上益城郡御船町豊秋	円墳	横穴式石室	6世紀前半	勾玉1(碧玉1)、勾玉1(めのう1)	
72	小坂大塚古墳	熊本県上益城郡御船町小坂	円墳	横穴式石室	5世紀中頃	勾玉、管玉、切子玉、ガラス小玉	
73	今城大塚古墳	熊本県上益城郡御船町滝川字今城	円墳	横穴式石室	—	勾玉12、管玉51、切子玉1	装飾古墳
74	神ノ山2号墳	熊本県宇土市松山町字東原	円墳	横穴式石室	6世紀中頃～後半	小玉(ガラス)	玄室より出土
75	神ノ山1号墳	熊本県宇土市野鶴町字神ノ木	—	横穴式石室	6世紀中頃	切子玉、小玉、丸玉	
76	塚原1号墳	熊本県下益城郡城南町塚原	円墳	—	—	管玉1(碧玉1)、丸玉1(ガラス1)	
77	塚原2号墳		円墳	横穴式石室	—	管玉1(碧玉1)	
78	塚原3号墳		円墳	—	—	丸玉8(ガラス8)、小玉1(ガラス1)	周溝内、主体部の掘方より出土
79	塚原12号墳		円墳	—	—	管玉2(碧玉2)	周溝内より出土
80	塚原19号石棺		—	石棺	—	勾玉1(滑石1)	周溝内より出土
81	北原1号墳		—	横口式家形石棺	—	小玉1(ガラス1)	
82	丸山3号墳		円墳	組合式石棺	—	玉類	
83	上の原1号墳		円墳	横口式家形石棺	—	玉類(ガラス)	
84	上の原2号墳		円墳	横穴式石室	—	管玉	
85	上の原3号墳		円墳	—	—	玉類(ガラス)	
86	上の原12号墳	円墳	—	—	管玉		
87	古保里2号石棺	熊本県宇土市古保里町居屋敷	—	箱式石棺	4世紀後半～5世紀前半	小玉32(ガラス32)、勾玉2(硬玉2)、管玉1(碧玉1)	
88	西潤野2号墳	熊本県宇土市立岡町字西潤野	円墳	箱式石棺	5世紀前半～中頃	白玉777(滑石777)	棺内出土鏡面上より出土、人骨
89	潤野3号墳2号土壊墓		前方後円墳	土壊墓	4世紀後半～末	小玉2(ガラス2)	
90	国越古墳	熊本県宇城市不知火町長崎	前方後円墳	横穴式石室	6世紀前半	勾玉、管玉、空玉、丸玉、小玉	装飾古墳
91	向野田古墳	熊本県宇土市松山町字向野田	前方後円墳	竪穴式石室	4世紀末	勾玉4(硬玉4)、管玉82(碧玉82)、小玉228以上(ガラス228以上)	人骨
92	境目5号石棺	熊本県宇土市境目町字西原	—	箱式石棺	5世紀前半	小玉1(ガラス1)	
93	境目6号石棺		—	箱式石棺	5世紀前半	小玉1(ガラス1)	人骨
94	塚原平古墳	熊本県宇城市不知火町高良	円墳	横穴式石室	—	勾玉1(めのう1)、管玉6(碧玉6)、小玉6(ガラス6)	玄室より出土
95	神の元1号墳	熊本県宇城市不知火町高良	円墳	横穴式石室	7世紀初頭～前半	小玉2(ガラス2)	玄室より出土
96	年の神1号墳	熊本県宇城市小川町北小野	円墳	横穴式石室	7世紀中期～8世紀中期	小玉5	
97	年の神2号墳		円墳	横穴式石室	7世紀末～8世紀初頭	小玉5(ガラス5)	人骨
98	姫ノ城古墳	熊本県八代郡水川町大野北川	前方後円墳	横穴式石室	—	切子玉(水晶)	
99	端ノ城古墳	熊本県八代郡水川町野津	前方後円墳	石棺式石室? 横口式家形石棺?	—	丸玉5(ガラス5)	
100	中ノ城古墳	熊本県八代郡水川町野津	前方後円墳	横穴式石室	—	小玉3(ガラス3)	盗掘あり
101	物見槽古墳	熊本県八代郡水川町野津	前方後円墳	横穴式石室	—	小型勾玉6(ガラス6)、勾玉6(ヒスイ6)、小玉232、管玉1(碧玉1)	
102	大瀬田1号横穴墓	熊本県奄美北町高塚大瀬田	—	横穴墓	—	勾玉、管玉、小玉	人骨
103	岩立C古墳	熊本八代郡水川町立神字岩立	円墳	横穴式石室	6世紀末～7世紀	丸玉1(めのう1)	玄室より出土
104	城2号墳	熊本県宇土市上綱町字城	円墳	竪穴系横口式石室	5世紀前半	管玉10(滑石10)、小玉10(滑石10)	攪乱あり
105	境2号墳	熊本県八代市岡町小路	円墳	横穴式石室	—	勾玉1(こはく1)、管玉2(碧玉1、ガラス1)、切子玉1(ガラス1)、丸玉1(ガラス1)	玄室より出土
106	小田良古墳	熊本県宇城市三角町中村字前畑	円墳	横穴式石室	5世紀前半	管玉5(ガラス5)、小玉99(ガラス99)、白玉800(滑石800)、勾玉5	盗掘あり、人骨、装飾古墳
107	平松3号石棺	熊本県宇城市三角町波多	—	箱式石棺	—	小玉	
108	平松4号石棺		—	石棺	—	小玉	
109	平松9号石棺		—	石棺	—	玉類	
110	千崎5号墳	熊本県上天草市大矢野町維和	円墳	横穴式石室	5世紀	小型勾玉11(緑色凝灰岩11)、白玉28(緑色凝灰岩28)	屍床内より出土
111	千崎11号墳		—	箱式石棺	—	玉類	
112	千崎13号墳		—	箱式石棺	円墳	小玉(ガラス)	
113	樹ノ木尾ばね古墳北朝石室	熊本県上天草市大矢野町維和	—	竪穴式石室	—	勾玉2(碧玉2)、管玉12(碧玉10、緑色凝灰岩1、不明1)	人骨
114	カミノハナ1号墳	熊本県上天草市松島町合津字水浦	円墳	横穴式石室	—	小玉151	
115	カミノハナ3号墳		円墳	横穴式石室	—	丸玉48、小玉232、勾玉3(碧玉1、ガラス2)	
116	カミノハナ6号墳		円墳	横穴式石室	—	勾玉1(碧玉1)、切子玉4(水晶4)、丸玉3(軟玉3)、小玉1(ガラス1)	
117	大戸鼻3号墳	熊本県上天草市松島町阿村	円墳	横穴式石室	—	玉類	装飾古墳
118	妻の鼻3号墓	熊本県本渡市亀場町大字亀川字下湯	—	地下式板石積石室墓	5世紀後半～6世紀前半	小型勾玉11(滑石11)、勾玉2(滑石1、ガラス1)、管玉3(碧玉1、緑色凝灰岩2)、小玉94(滑石87、ガラス7)	人骨
119	妻の鼻11号墓		—	地下式板石積石室墓	5世紀後半～6世紀前半	小玉3(滑石3)	人骨
120	妻の鼻17号墓		—	地下式板石積石室墓	5世紀後半～6世紀前半	小型勾玉5(滑石5)、勾玉2(滑石1、ガラス1)、小玉47(滑石43、ガラス4)	人骨
121	薮坪横穴墓	熊本県本渡市本渡町大字広瀬字江古平	—	横穴墓	4世紀	勾玉1(ヒスイ1)	
122	五反田古墳	熊本県八代市敷川内町字五反田	円墳	横穴式石室	6世紀	勾玉1、管玉4、小玉31	装飾古墳
123	田川内1号墳	熊本県八代市日奈久新田町字田川内	円墳	横穴式石室	5世紀末	丸玉10(ガラス10)	装飾古墳
124	荒毛遺跡2号地下式板石積石室墓	熊本県人吉市下原町字尾園	—	地下式板石積石室墓	—	小玉1(ガラス1)	
125	荒毛遺跡7号地下式板石積石室墓		—	地下式板石積石室墓	—	勾玉1(ヒスイ1)、小玉4(ガラス4)	

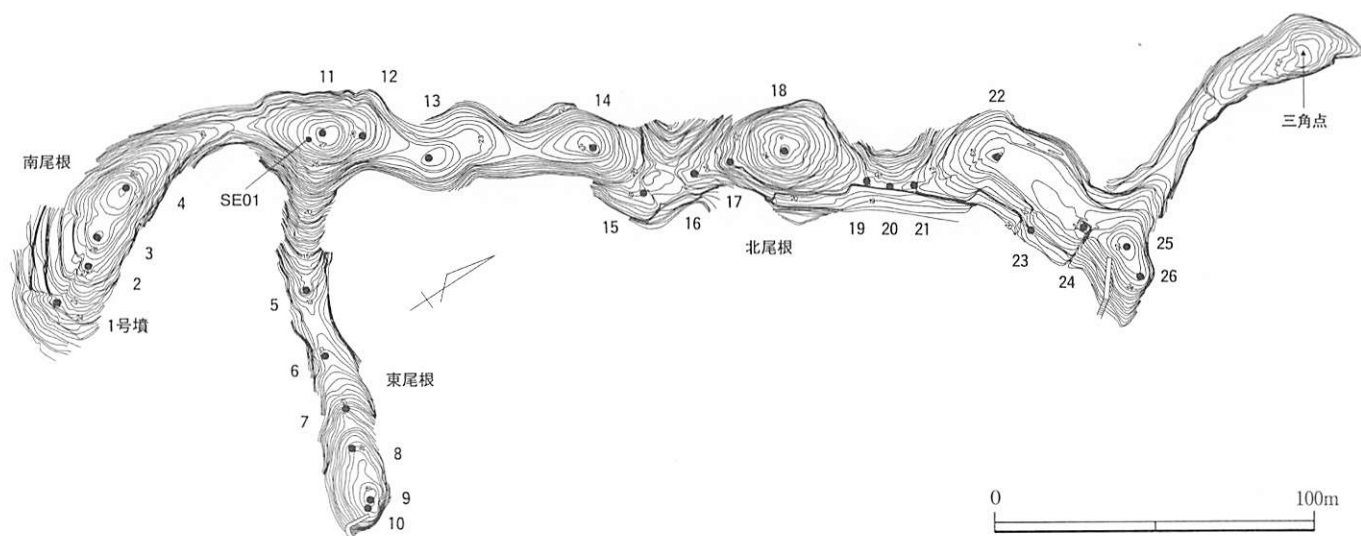
二 調査経過

1. 過去の調査（第1次～第6次調査）

第1次調査 千崎古墳群に対する初めての考古学的調査（第1次調査）は、1955年、玉名高等学校考古学部によって行われ、古墳の分布状況が確認されるとともに、4基の箱式石棺（10・11・13・18号墳）が発掘調査され、鉄剣等の副葬品や人骨が検出された（田辺1955a・1955b）。

第2次調査以降 その後、約半世紀のあいだ千崎古墳群の調査は行われていなかったが、2002年度に町史編纂事業を開始した大矢野町（2004年度から上天草市）によって2003年度から2006年度までに4回の調査が実施された（第2次～第5次調査）。さらに、それを受け継ぐかたちで、2007年度には熊本大学文学部考古学研究室によって第6次調査が行われた。

これら近年の一連の調査では、まず、古墳群が営まれた千崎丘陵全体の測量図が作成され、古墳分布の全容が明らかにされた（第2図）。また、すべての箱式石棺および石室の現状における記録が作成された。それと同時に、5・6・10号墳の発掘調査も実施された。それらのうち6号墳では、地山面にまでおよぶ徹底的な破壊を受けていることが判明したのみであった。しかし、5号墳では、その墳丘が直径約6mの円墳であること、主体部がごく狭い羨道を有す横穴式石室であることが明らかとなった。その結果、従来積石塚とされてきたものは破壊された石室石材が散乱した状況をとらえたものであることが判明した。さらに、墓壙の断ち割り調査の結果、玄室壁体の持ち送り開始レベルと墓壙内に控え積み石材を配置し始めるレベルが一致することなどが明らかとなり、石室構築過程の一端が復元された。しかし、石室閉塞状況の解明は今後の課題として残された。他方、10号墳では、およそ50年ぶりに箱式石棺の蓋石が取り外され、墓壙の断ち割り調査が実施された。その結果、2段墓壙であること、北側棺外テラス面にミニチュア農工具が副葬されていること、西側棺外テラス面には砂岩片が集中して置かれていることが明らかとなった。しかし、整理作業の過程で、石棺周囲に散布していた石材が北側蓋石欠損部の破片であることが判明し、その接合後の実測図作成が喫緊の課題として残された（森編2005、前田編2006、三好・仙波編2007、山野・有馬編2008）。（杉井）



第2図 千崎古墳群の古墳分布図（1/2400）

第3表 2008年設置測量基準点の現場座標

基準点名	X座標 (m)	Y座標 (m)	標高 (m)	備考
S E01	0.000	0.000	26.783	
S E40	312.565	-31.979	23.80	四等三角点汐浜
四等三角点後大湯	-434.134	-1218.440	22.98	
T25-1	257.885	32.646		2004年設置
T25-2	257.229	30.737		〃
T25-N	259.372	30.841		2008年設置
T25-S	255.798	32.657		〃
T25-E	258.492	33.533		〃
T25-W	256.226	29.068		〃

第4表 2008年設置測量基準点の国土座標

基準点名	X座標 (m)	Y座標 (m)	備考
S E01	-45949.870	-49593.197	
S E40	-45665.753	-49458.995	四等三角点汐浜
四等三角点後大湯	-45691.847	-50860.717	
T25-1	-45745.964	-49431.973	2004年設置
T25-2	-45745.539	-49433.947	〃
T25-N	-45743.758	-49432.750	2008年設置
T25-S	-45747.756	-49433.043	〃
T25-E	-45745.903	-49430.900	〃
T25-W	-45745.535	-49435.894	〃

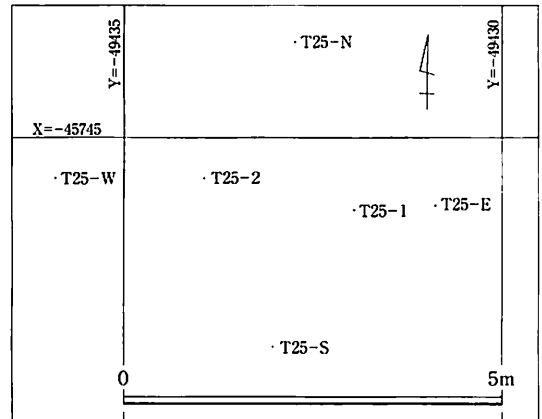
2. 第7次調査

第7次調査の実施に先立ち、10号墳箱式石棺の北側蓋石欠損部とその破片の接合作業を、株式会社葵文化に依頼した。現地から北側蓋石を搬出したのは2008年7月10日のことだったが、2週間後の24日にはほぼ完形に復元された蓋石を現地に戻すことができた。

さて、第7次調査では、5号墳横穴式石室の閉塞状況の解明を最大の目的とした。また、接合後の10号墳箱式石棺北側蓋石の記録作業およびその観察も重要な目的であった。さらに、地表に現れた部分を観察したのみでは不明な点が多かった25号墳箱式石棺の構造解明も調査目的の1つに加えた。調査期間は、2008年8月25日から9月23日までの30日間である。

10号墳箱式石棺北側蓋石の記録作業は順調に進み、調査開始から4日目にはほぼすべての作業を終了した。5号墳では、閉塞石の前面に積まれた石材を取り外す作業から始めた。この石材は、羨門に立てられた閉塞石をその外側から押さえる目的で積み上げられたものと考えられ、最終埋葬当時の原位置を保っている。したがって、取り外し作業は、記録をていねいに作成しつつ慎重に進めた。前庭部床面認定のための土層の解釈に頭を悩ませたが、調査開始から約2週間が経過した時点で、閉塞石および前庭部の全貌を検出することができた。その後、閉塞石の取り外し、前庭部の実測などの作業を継続した。なお、石室の埋め戻しに際しては調査開始以前の状態に復元することを心がけたが、閉塞石だけは今後の整理作業や将来の展示等に活用することを目的に持ち帰った。25号墳では、第3次調査の現状実測時に設置した杭が使用できなかったため、箱式石棺の主軸に沿った位置に新たな杭を設け、それを基準に2m四方の調査区を設定した。そして表土を除去したところ、すぐに地山面に達し、南北両側の長側石および東側の小口石の存在を確認することができた。しかし、西側の小口石は原位置に遺存していなかった。そのため、棺内および棺外の断ち割り作業を行い墓壙の位置を慎重に検討した結果、当石棺はきわめて短いものであることが明らかとなった。また、その南側長側石は安山岩製であると教えられ、すべての部材が安山岩製である隣接の26号墳と合わせ、千崎古墳群中での特異性が際立つ結果となった。なお、現地説明会は9月6日に実施し30名余りの参加を得た。

6年間にわたる千崎古墳群の調査は、今回でひとまずの終了を迎えた。これまでに本書を含め5冊の概報を発行してきたが、今後にはそれらを総括した正式報告書の作成作業が待っている。調査の本当の終わりは、それが完成したときである。今しばらく、千崎古墳群にかかわって巣立っていった学生諸君にはつきあってもらわなければならない。(杉井)



第3図 25号墳基準点の位置関係

三 5号墳の調査成果

1. 過去の調査経過（第2次～第6次調査）

5号墳は、11号墳のある尾根分岐点から斜面を50mほど南東に下った、東尾根中央の鞍部に位置する。

第2次調査 2003年度の第2次調査開始時点では、5号墳は低い円丘状の高まりとなっており、その高さは1m程度であった。高まりの上面を中心とした南北約7m、東西約4mの範囲には、多くの石材が散在しており、それら石材のうち原位置を保っているもの並び方から判断して、当墳に竪穴式石室の下半部が残存している可能性が推測された（森編2005）。

第3次調査 2004年度の第3次調査は、現状での石材散布状況の記録と石室構造の把握を目的として実施された。そのため、現状で確認できる石室上面プランに合わせた主軸（T5-1・T5-2ライン）を設定し、石材散布状況の実測図作成と、石室上面の検出および石室内埋土の一部掘り下げが行われた。その結果、石室上面の石材が明瞭に検出され、石室下半部が良好に残存していることが確認された。よって、千崎古墳群においてこれまで積石塚とされてきたものは、破壊された石室石材が散乱した状況を捉えていたものと判断された（森編2005）。

第4次調査 2005年度の第4次調査では、墳丘の形態および規模の確認と、石室内部構造の解明が目的とされた。調査の結果、墳丘の下半部は地山を削り出すことによって構築されていること、またその輪郭は斜面上側においては溝を掘り込むことによって、丘陵斜面の下側および尾根筋直交方向においては平坦面を造り出すことによって画されていることが明らかとなった。また、石室内埋土の掘り下げの途中で南側に羨道が発見され、5号墳の主体部は横穴式石室であることが判明した（前田編2006）。

第5次調査 2006年度の第5次調査は、横穴式石室の構造解明を目的として実施された。石室内埋土に石室石材と考えられる転落石が多く含まれていたため、掘り下げは慎重に行われた。掘り下げの途中で、玄室内東側に仕切り石で画された屍床が検出された。屍床内の追葬面直上で赤色顔料が確認され、初葬面直上では勾玉10点、白玉13点が原位置を保った状態で出土した。また、屍床内埋土についてはふるいがけを行っており、新たに勾玉1点と白玉15点がみつかった。しかし時間的な制約から、石室の実測作業と構造解明は次年度に持ち越された。

第6次調査 2007年度に行われた第6次調査では、石室の実測作業と構築過程の解明が目的とされた。実測図は、新たに設定した主軸（T5-N・T5-Sライン）、およびそれに直交するT5-Nから南に4mライン（T5-E・T5-Wライン）を基準に作成している。また、石室の実測作業と並行して、石室の東、西、北に調査区を設定し、墓壙の検出が行われた。さらに、東西の調査区および玄室内において断ち割りを行っており、墓壙埋土と墓壙底の状況が確認されている（山野・有馬編2008）。しかし、前庭部構造の解明と石室閉塞状況の確認は、今後の課題として残された。（柴田）

2. 調査区の設定と調査経過（第4図）

調査目的 5号墳はこれまでの調査により、墳丘の形態、規模、石室構造などが確認されていた。今年度の調査は、未発掘であった前庭部の構造解明と石室閉塞状況の確認を目的として実施された。

調査区は、T5-Nから南に7mの地点で主軸と直交するラインを南端として、主軸の東西両側に設定された。それぞれを前庭部東調査区、前庭部西調査区と呼称する。東調査区は、T5-Nから7mの地点より、主軸に沿って、北へ1.4m、東へ1.4mの範囲に設定した。また、主軸に沿った幅20cmの土層観察用のベルトを、主軸の西側に設定した。ベルトの西側には、西調査区を南北1.55m、東西1.3mの範囲に設定した。

調査区の設定後は、羨門閉塞石前面に積まれた石材の取り上げ作業が行われた。それらの石材を以後、閉塞石前面積み石と呼称する。閉塞石前面積み石の取り上

げ後、羨門床石と閉塞石、および前庭部側壁が検出された。閉塞石は、出土状況を詳細に記録した後に取り上げている。

また、石材取り上げ作業と並行して、東西両調査区の掘り下げと一部の断ち割りが行われ、墓壙ラインが検出された。なお、記録作業が全て終了した後は、土のうを用いて埋め戻しを行っている。取り上げた石材に関しては、閉塞石のみを大学に持ち帰り、それ以外の石材は旧状に復した。(柴田)

3. 横穴式石室の構造

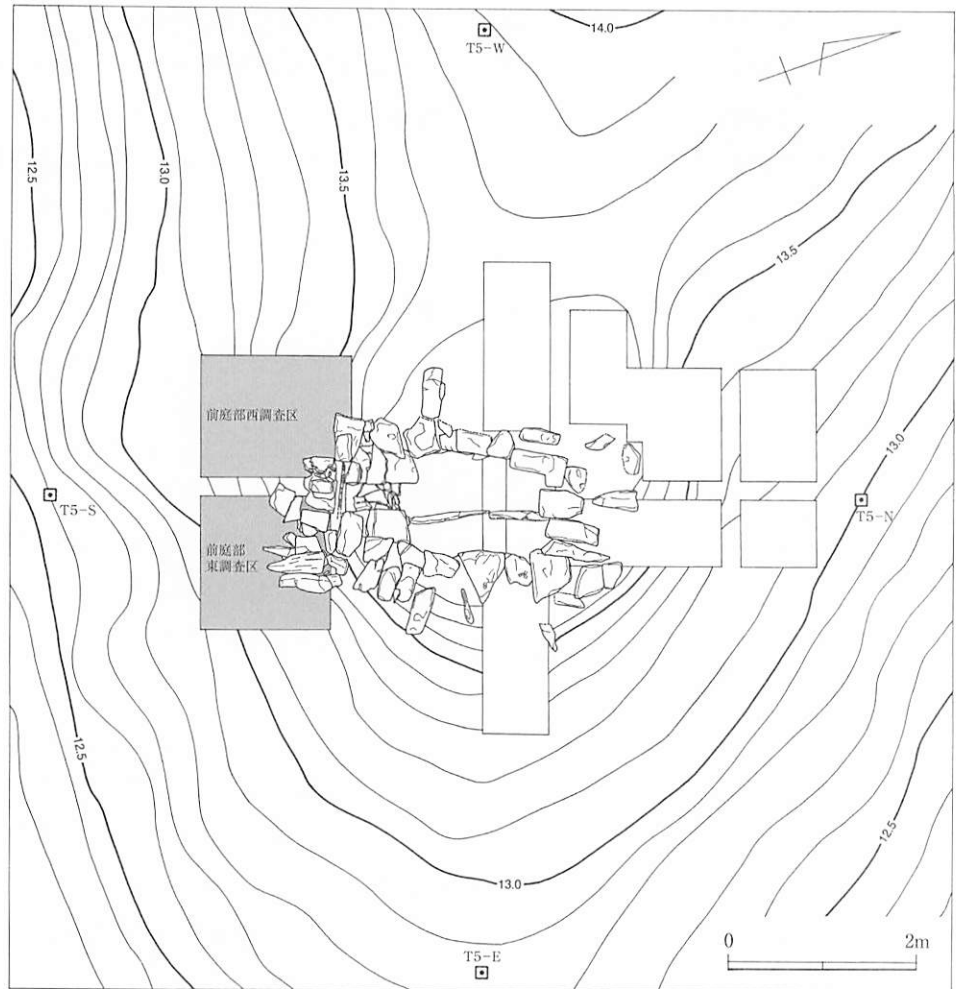
(1) 玄室・羨道・墓壙の構造—第6次調査までの所見—(第5図)

5号墳の主体部は、直径約6mの円墳中央に位置する横穴式石室である。羨道と玄室を合わせた長さは2.27mである。主軸方向はN19°Eで、東尾根筋に直交し、南に開口する。石室の上半部は崩落し、残存していない。

以下では『考古学研究室報告』第43集(山野・有馬2008)をもとに、玄室、羨道および墓壙の構造について略述する。なお、左右は羨道側から玄室を見た方向で示すこととする。

i) 玄室

玄室の平面形は主軸方向に伸びた長方形をなす。規模は長さ1.68m、幅1.25mである。墓壙 玄室底に腰石を据えることで玄室のプランを確定している。両側壁には3枚ずつ、前壁・奥壁には2枚ずつの腰石が設置されている。腰石同士の関係から、両側壁の腰石が先に据えられ、その



第4図 5号墳調査区設定図(アミ部は今年度の調査区を示す。)

後に前壁・奥壁部分の腰石が配置されたと考えられる。

壁体は、腰石上に自然石または割り石を平積みすることで構築されている。一定のレベル（標高13.450m）まで垂直に石材が積まれた後、四隅に隅角消しの石材が配置される。隅角消しの石材は隣接する壁体に跨って置かれていることから、各壁体は同時に構築されたと考えられる。隅角消しの石材の上からは持ち送りながら石材が積まれており、現存していない玄室天井部は穹窿状を呈していたと考えられる。

屍床

屍床は玄室右側壁沿いに一箇所存在する。屍床を画す仕切り石は、平滑に加工された2枚の板石によって構成されており、仕切り石上面のレベルは持ち送りが開始されるレベルとほぼ等しい。

玄室と屍床の床面はほとんど同じレベルで、地山礫を細かく砕いたような小礫が敷き詰められた層で構成されている。屍床内の床面直上から玉類が検出されており、ここが初葬面だと判断された。さらに、初葬面上に再び平坦面が形成され、その直上でベンガラを含む土層が検出されたことから、追葬が行われたと考えられる。玉類やベンガラは屍床南側で検出されたため、初葬・追葬ともに頭位方向は南であった可能性が高い。

ii) 羨道

羨道

羨道は、長さ59cm、幅は羨門側で42.5cm、玄門側で30cmである。現存する高さは、右側壁が約50cm、左側壁が約60cmである。羨道床面のうち、玄室側は自然石の板石を敷くことによって、羨門側は粘質土を充填することによって形成されている。羨門付近の壁体直下にも同様の粘質土がみられる。玄室左袖基底部に設置されている腰石が羨道まで突出し、羨道床面の一部を構成している状況が確認された。また、羨道壁体の玄室側の石材は、玄室前壁をも構成しており、羨道と玄室は並行して構築されたことが分かる。

iii) 墓壙

墓壙

墓壙は丘陵を形成する地山岩盤を掘り込むことによって構築されている。東西幅は約3.2～3.6mである。2007年度の調査において、墓壙の平面形は隅丸長方形を呈し、墓壙底はほぼ平坦面をなすと推定された。ただし、玄室両側壁の腰石下端の標高は、東西墓壙底の標高よりも低い。このことから、腰石設置箇所には掘り込みが設けられているものと考えられる。

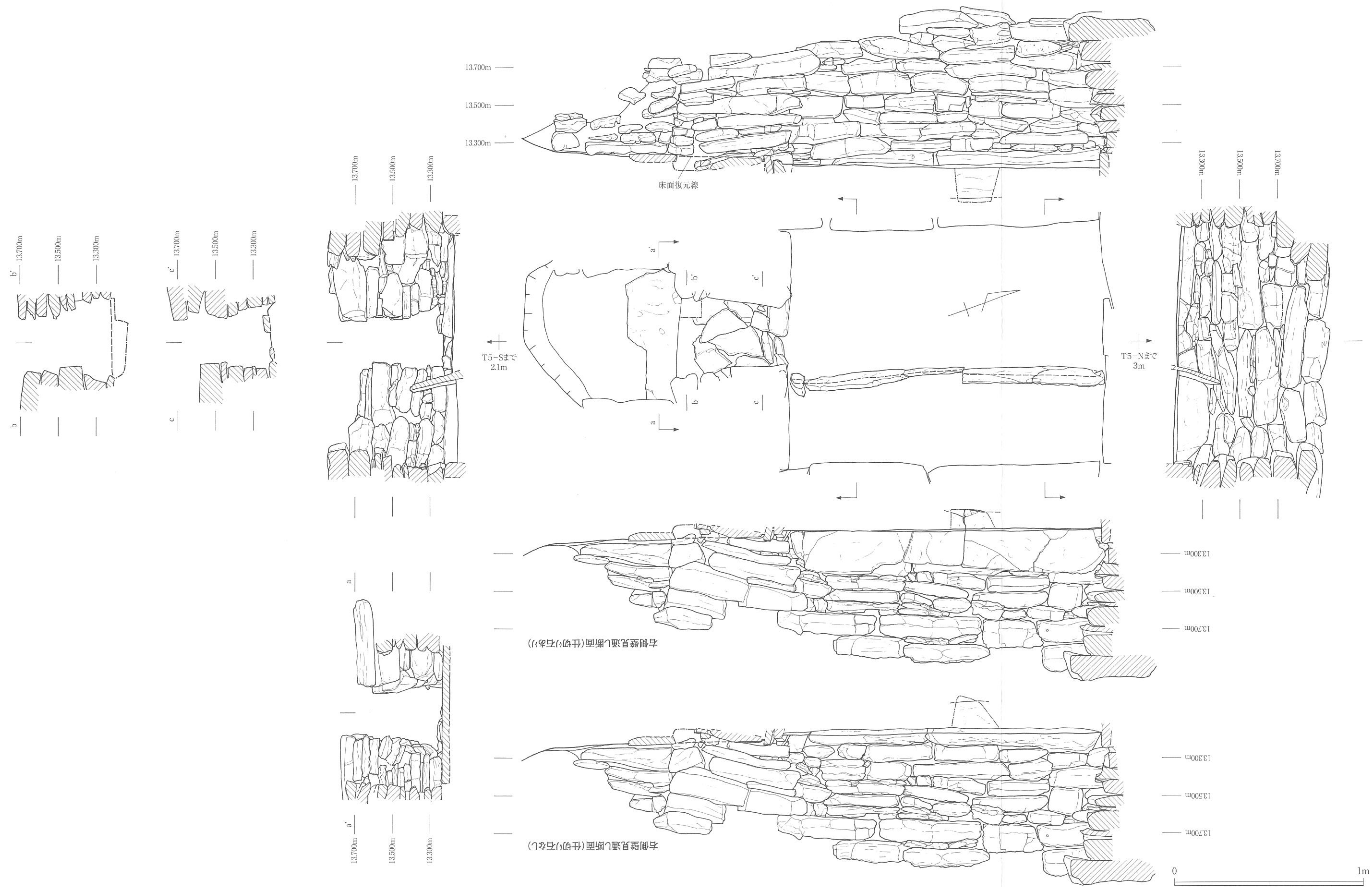
石室内で持ち送りが開始されるレベルになると、墓壙埋土中に控え積み石材が多くみられるようになり、また墓壙内の石室壁体側には地山礫を多く含む土が充填され始める。こうした構造は、持ち送りがなされる石室壁体を補強する目的があるものと考えられる。

なお、『考古学研究室報告』第43集に掲載した石室の実測図では、壁体を構成する石材のみならず、石室内から見通せる控え積み石材も含めて図示していた。今回提示したもの（第5図）では壁体を構築する石材のみを示し、控え積み石材は除いている。（赤崎）

(2) 前庭部の構造（第8・9図）

前庭部の規模

前庭部は羨道壁体前面と、そこに接する側壁によって構成されている。前庭部の大きさは、羨道壁体前面から主軸上で計測して長さ75cm、その幅は65cmである。したがって前庭部を含めた石室の全長は3.02mとなる。前庭部両側壁は主軸とほぼ平行し、その主軸からの距離は右側壁で30cm、左側壁で35cmである。また、側壁の羨道壁体前面からの長さは、右側壁49cm、左側壁63cmを測る。現存する両側壁の上面は羨門側から南に向かってレベルを下げていく。壁体の高さは、最も良好に残存している左側壁の羨門側で52cmである。



第5図 5号墳石室実測図

前庭部側壁は、自然石または割石を平積みし、その間に粘質土を充填することによって構築されている。この粘質土は、前庭部床面を構成している白色土と同質である。前庭部右側壁は、現状で2～4段の石積みが残存している。平坦な床面上に長さ約50cmの石材を据え、その上に長さ20～35cmの平らな石材が積まれた状況が確認された。前庭部左側壁は現状で3～7段の石積みが残存している。羨道左壁体前面の最下段にはL字形石材が配されており、それは前庭部左側壁の最下段の一部でもある。このL字形石材と長さ45cmの石材が前庭部左側壁の最下段に据えられ、その上に長さ10～20cm程度の石材が積み重ねられていることが明らかとなった。左側壁は、石材間に大量の粘質土が充填されている点で右側壁と大きく異なっており、この粘質土は石積みと共に壁体を構成するものである。

前庭部側壁

前庭部と羨道は、左側壁最下のL字形石材を除いて、壁体を構成する石材を共有しておらず、前庭部側壁の北端が羨道壁体前面と接するように積み重ねられていることが判明した。

羨道との関係

前庭部の床面は礫を含む粘質土（第9図36・37層）で構築されており、羨門側の高さは羨門床石上面と揃えられているが、開口部方向へ向かって徐々にレベルを上げている。（一本）

前庭部床面

(3) 閉塞

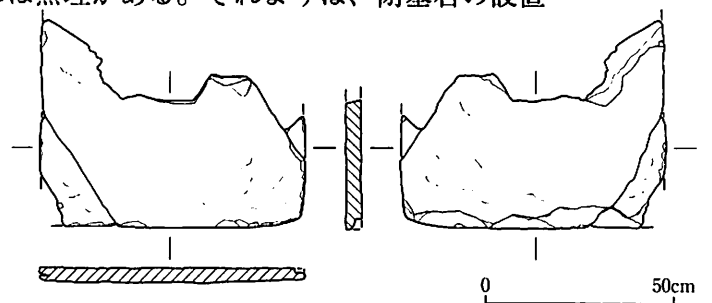
i) 閉塞石（第6～8図）

羨門の閉塞には、板状に加工した1枚の砂岩を用いている。閉塞石は羨門床石と直接接しているが、閉塞石前面積み石や羨道壁体前面との間には土が詰まっている。閉塞石は長さ70cm、厚さ4cm、現状での高さが50cmであるが、その上部は後世の攪乱によって大きく破損しており、本来の高さはこれより大きなものとなろう。板状で面が平滑に整えられている点は玄室の仕切り石と共通しているが、閉塞石の方がより平滑で、厚みも均等に整えられている。表面を観察した結果、閉塞石の両面全体にノミ叩き痕と思われる加工痕が確認された（第7図）。しかし、閉塞石側面は著しく欠損しており加工痕はみとめられなかった。

閉塞石

閉塞石は、その上部の欠損以外にも、西側下端隅が失われていた。また、羨道側の下端部表面も欠失していた（第6図）。こうした下端部は閉塞石前面積み石や羨道前面に隠された部分であるから、後世の攪乱時に破損を被ったとするには無理がある。それよりは、閉塞石の設置当初から、当該箇所が失われていたとみなす方が蓋然性が高い。これら下端部の欠失箇所に接合する破片が検出されなかったことも、この推測を裏付ける。こうしたことを踏まえると、閉塞石下端部の欠失箇所は、幾度かの追葬行為を経る過程で形成されたものである可能性が高い。

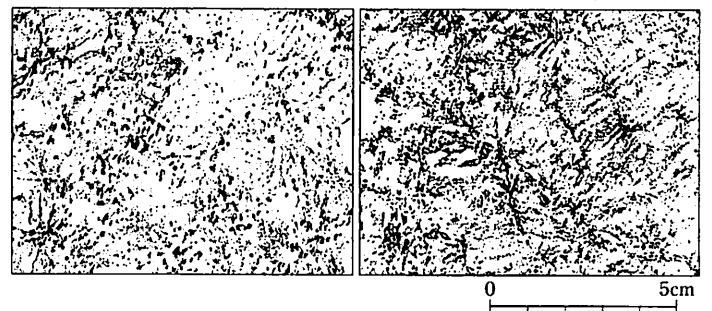
閉塞石の欠損



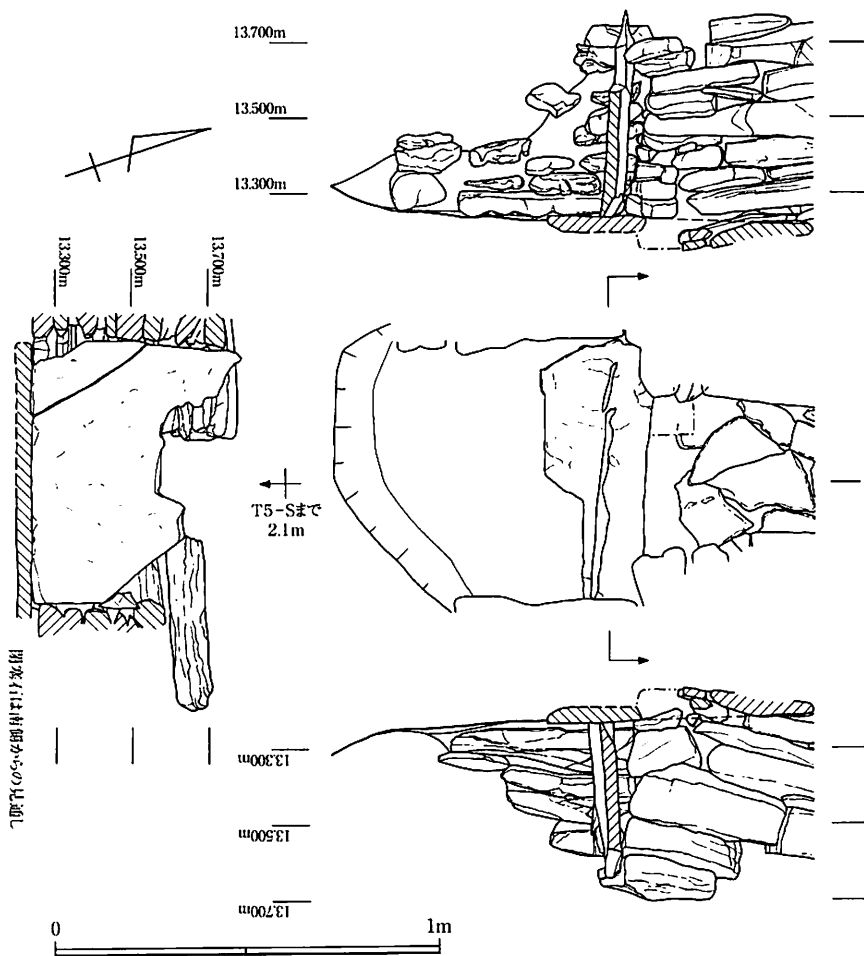
第6図 5号墳閉塞石実測図（左：前庭部側、右：羨道側）

ii) 閉塞石前面積み石（第9図）

前庭部構造の把握と石室閉塞状況の解明のため、今年度の調査では閉塞石前面積み石を全て取り上げた。その結果、閉塞石前面には現状で6段にわたって石材が積み重ねられていることが判明した。検出された石材は47個であった。以下では今年度の調査成果に基づき、閉塞石前面積み石の構造について述べる。



第7図 5号墳閉塞石加工痕（左：前庭部側、右：羨道側）



第8図 5号墳石室前庭部と閉塞石

閉塞石設置後、その前面の前庭部床面に置き土（8・9層）をすることで一度整地面が形成されている。8層上面から炭化物が検出されたため、この段階で火の使用があった可能性がうかがえる。その後、最下の閉塞石前面積み石が置かれており、この石材と閉塞石の間には砂質土（7層）が詰められている。続いて、地山礫を多く含む粘質土（6層）を最下の積み石の南側に敷くことで、もう一度整地面が形成される。その後は、石材の間に灰白色の粘質土（5層）を充填しながら、積み石が5段にわたって設置されている。最下の積み石は形や大きさが揃っており選択して使用された可能性が高いが、それ以降に積まれた石材は形や大きさが揃っていない。なお、上部2段の積み石に関しては、石材の間に表土と同質の腐植土（4層）が流入していた。

この腐植土は石材が露出した後に入り込んだものであると考えられる。（松崎）

（4）前庭部に関連する墓壇（第9・10図）

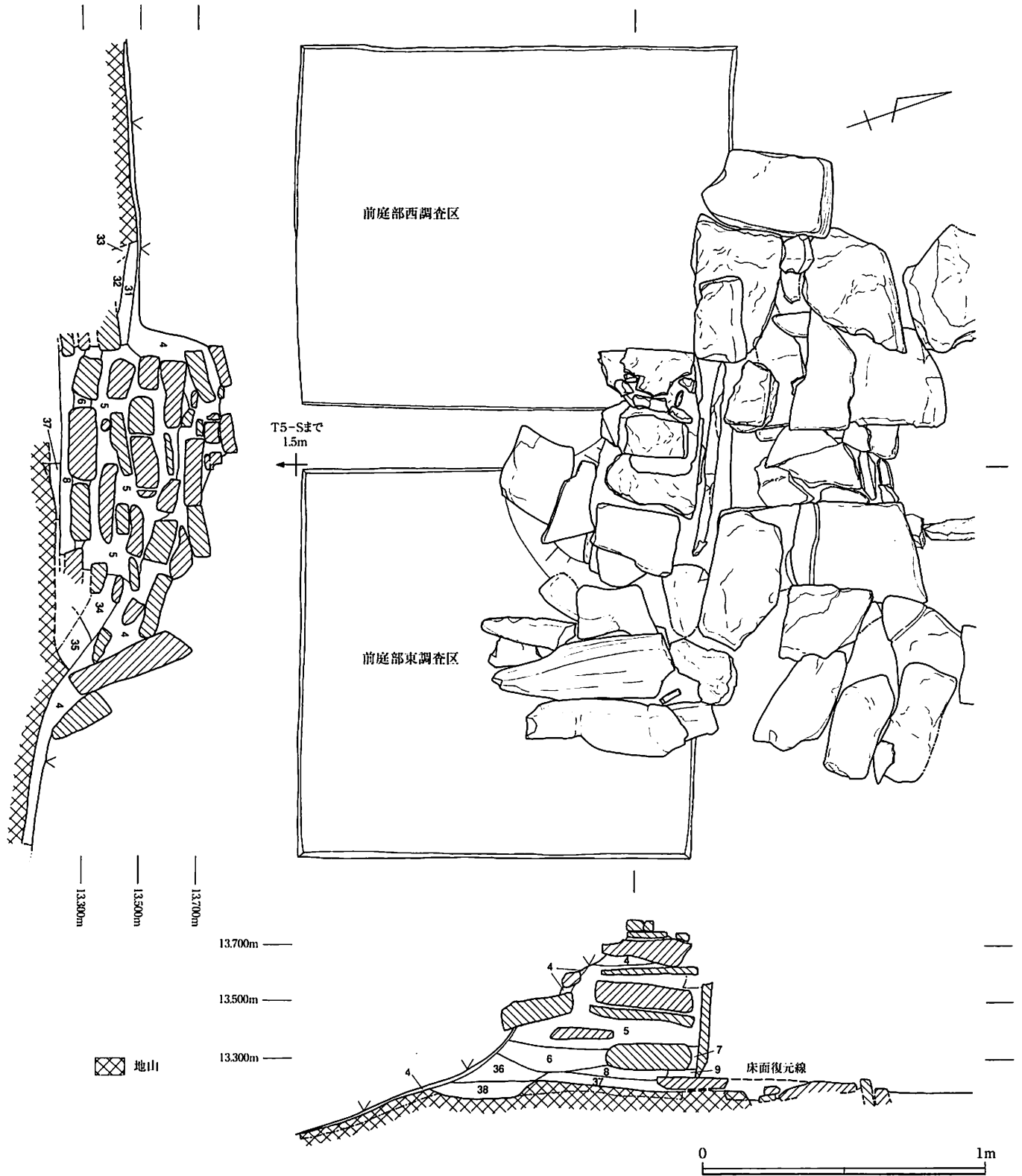
墓壇の規模

前庭部東西両調査区ともに、調査区内の原位置を保っていない石材を取り上げ、表土を除去した段階で墓壇ラインが検出された（第10図）。確認された墓壇ラインの最大幅は、前庭部東西両調査区の北端で、主軸から東に98.5cm、西に83cmである。また、墓壇ラインの南端はT5-Nから南へ6.51mの位置にあり、羨道壁体前面からの距離は1.07mである。5号墳の墓壇は地山の岩盤を掘り込んで形成されており、前庭部の墓壇底の標高は13.202mである。また、墓壇の南端では地山が一部溝状に掘り込まれているようで、これによって前庭部の長さを画していた可能性がある。ここに38層が充填された後、36・37層を羨門床石上面と同じ高さまで充填することによって、前庭部床面が構築されている。36層上面は、開口部方向へ徐々にレベルを上げ、前庭部前端を形成している。

前庭部西調査区の一部を断ち割って調査を行った結果、墓壇ラインと前庭部側壁との間隔が狭く、墓壇の平面形が前庭部側壁の外郭ラインに沿った形状であることが明らかとなった。墓壇底の標高が石室全体でほぼ等しいことも踏まえると、5号墳では当初から前庭部の構築を意識して墓壇の掘削が行われたと考えられる。

墓壇埋土

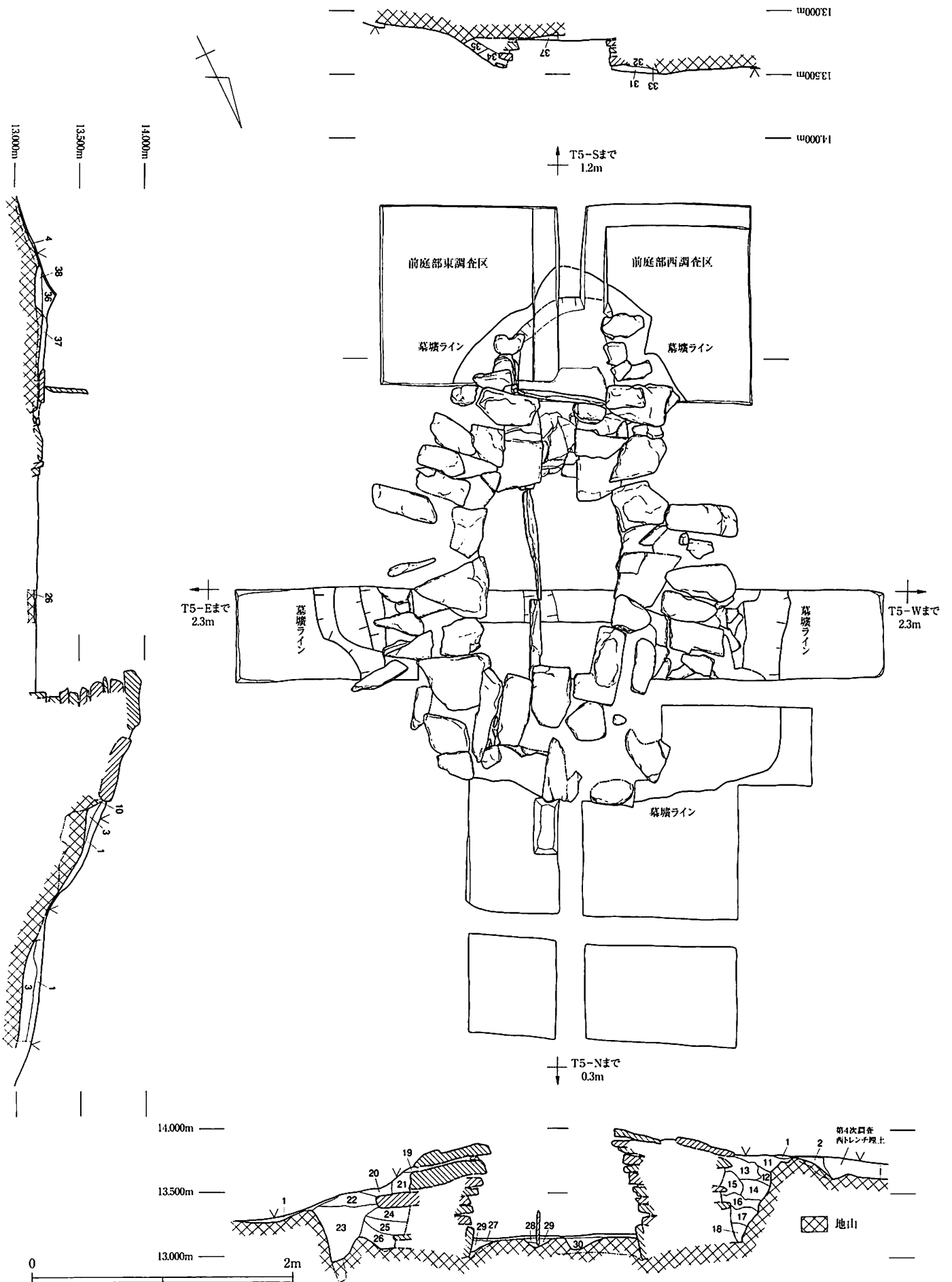
前庭部左側壁側の墓壇には、地山礫を多量に含む砂質土（33層）と礫を含まない粘質土（32層）の上に、粘性の強い砂質土（31層）が充填されていることが判明した。32層上面の標高は13.430～13.460mであり、これは玄室壁体で持ち送りが開始されるレベルとほぼ同じである。



- | | | | | | |
|--------------------|------------------------|------------------------------|----|----------------------|----------------------------------|
| 4 | にぶい黄褐色砂質土 (Hue10YR6/3) | 表土と同質の腐植土が流入している。 | 7 | 淡黄色砂質土 (Hue2. 5Y8/4) | 地山礫を含まない。やや粘質。 |
| 最終閉塞に関連する土層 | | | | | |
| 5 | 灰白色粘質土 (Hue10YR8/2) | 地山の小礫を少量含む。 | 8 | 黄褐色粘質土 (Hue10YR8/8) | 地山の小礫を少量含む。 |
| 6 | 黄褐色粘質土 (Hue10YR8/6) | 2~3 cm 程の地山礫を多く含む。しまりやや悪し。 | 9 | 灰白色粘質土 (Hue10YR8/2) | 地山礫をほとんど含まない。しまり悪し。 |
| 前庭部に関連する土層 | | | | | |
| 31 | 浅黄褐色砂質土 (Hue10YR8/3) | 地山礫をほとんど含まない。やや粘質。 | 36 | 黄褐色粘質土 (Hue10YR8/8) | 5 cm 以上の地山礫を多く含む。しまり良し。床面を構成する層。 |
| 32 | 明黄褐色粘質土 (Hue10YR7/6) | 地山礫を含まない。しまり良し。 | 37 | 黄褐色粘質土 (Hue10YR8/8) | 地山礫を少量含む。しまり良し。床面を構成する層。 |
| 33 | 浅黄褐色砂質土 (Hue10YR8/3) | 5 cm 程度の地山礫を多く含む。 | 38 | 黄褐色粘質土 (Hue10YR7/8) | 5 cm 以上の地山礫を多く含む。 |
| 34 | 黄褐色粘質土 (Hue10YR8/6) | 地山の小礫を少量含む。しまり良し。 | | | |
| 35 | 浅黄褐色粘質土 (Hue10YR8/4) | 34層と同質だが、比較的地山礫の割合が少なくしまり悪し。 | | | |

第9図 5号墳前庭部調査区平面図・断面図 (土層番号は第10図からの連続)

三 5号墳の調査成果



第10図 5号墳調査区平面図・断面図(1)

また、右側壁側の墓壙埋土については、地山礫を含む粘質土（34・35層）が充填されているところまでを確認した。32・33層と34・35層は、墓壙埋土であると同時に前庭部各側壁の裏込め土でもある。(梶・松崎)

4. 前庭部構築と最終閉塞の状況（第9・10図）

(1) 前庭部の構築過程

はじめに墓壙の掘削が行われる。石室全体の墓壙底がほぼ同一のレベルに揃えられていることから、墓壙は一度に掘り込まれたと考えられる。また、前庭部の墓壙は前庭部側壁の外郭ラインに沿った形状であり、その南端には長さを画するためのものと考えられる掘り込みがあることから、この時点で前庭部を含む石室全体の平面プランが決まっていた可能性が指摘できる。続いて、前庭部床面を形成する36～38層の充填と羨門床石の配置が行われた後に、前庭部側壁が構築される。前庭部側壁は、石材を平積みし、その間に粘質土を充填することで構成されている。羨道左側壁前面の最下段に置かれているL字形石材は、前庭部に一端が突き出るように配置されており、前庭部左側壁の位置を規定している。ただし羨道と玄室が壁体の構成石材を共有しているのに対して、羨道と前庭部ではそうした状況は確認できず、L字形石材を除いて両者の石材が組み合うことはない。このため前庭部は、玄室・羨道とは独立して構築された可能性がある。

墓壙の掘削

側壁の構築

(2) 最終閉塞の状況

2007年度の調査では、追葬が行われた可能性が高いとしながらも、羨道の使用については明らかにすることができなかった（山野・有馬編2008）。しかし今年度の調査で、後世の改変が及ぶとは考えにくい閉塞石の下端部が著しく欠損していることが判明した。これらの欠損部に接合する石材が確認されていないことを合わせて考えると、5号墳では羨道を使用した追葬が行われた可能性が高い。以下では今年度の調査で確認された最終的な閉塞状況について述べる。

羨道の使用

閉塞石設置後、地山礫をほとんど含まない土（9層）と地山の小礫を含む土（8層）が閉塞石前面に置かれることで平坦な整地面が形成されている。8層上面で炭化物が検出されたことから、この段階で火を使用する行為があったと考えられる。続いて、整地面上に最下の閉塞石前面積み石が置かれ、砂質土（7層）が積み石と閉塞石の間に充填される。さらに、粘質土（6層）を最下の積み石の南側に敷くことで、再度整地面が形成されている。その後は、整地面上に閉塞石が隠れるまで積み石がなされたと考えられる。(一本)

最終閉塞

後世の埋土					
1	浅黄色土層	(Hue2.5YR7/4)	表土層。	2	にぶい黄褐色砂質土 (Hue10YR7/4) しまり悪し。
				3	明黄褐色砂質土 (Hue10YR7/6) 粒子は細かい。しまり悪し。
玄室に関連する土層					
10	にぶい黄褐色砂質土	(Hue10YR7/3)	地山礫を少量含む。しまり良し。	20	明黄褐色砂質土 (Hue10YR7/6) 地山礫を含まない。しまり良し。
11	にぶい黄褐色砂質土	(Hue10YR7/4)	地山礫をほとんど含まない。しまり良し。	21	にぶい黄褐色砂質土 (Hue10YR7/4) 5～10cm程の地山礫を含む。しまり良し。
12	浅黄褐色砂質土	(Hue10YR8/3)	地山礫をほとんど含まない。しまり良し。	22	にぶい黄褐色砂質土 (Hue10YR7/4) 地山礫を含まない。しまり良し。
13	浅黄褐色砂質土	(Hue10YR8/4)	10cm程の地山礫を含み、その間に2～5cm程の地山礫が見られる。しまり良し。	23	淡黄褐色砂質土 (Hue2.5YR8/4) 5～10cm程の地山礫を含む。しまり良し。
14	浅黄褐色砂質土	(Hue10YR8/3)	地山礫を少量含む。しまり良し。	24	浅黄褐色砂質土 (Hue10YR8/4) 2～3cmの地山礫を含む。しまり良し。
15	淡黄色砂質土	(Hue2.5YR8/4)	10cm程の地山礫を含み、その間に2～5cm程の地山礫が見られる。しまり良し。	25	淡黄色砂質土 (Hue2.5YR8/4) 4～6cm程の地山礫を含む。小礫間に砂質土を含む。しまり悪し。
16	浅黄褐色砂質土	(Hue10YR8/4)	10cm程の地山礫を含む。しまり良し。	26	浅黄褐色砂質土 (Hue10YR8/4) 地山礫を含まない。しまり悪し。
17	淡黄色砂質土	(Hue2.5YR8/4)	4～6cm程の地山礫を含む。しまり悪し。	27	にぶい黄褐色砂質土 (Hue10YR7/3) 地山の小礫で構成される。しまり悪し。床面を構成する層。
18	浅黄褐色砂質土	(Hue10YR8/3)	地山礫をほとんど含まない。しまり悪し。	28	にぶい黄褐色砂質土 (Hue10YR7/5) 粘土質の地山を含む。しまり悪し。
19	にぶい黄褐色砂質土	(Hue10YR7/4)	2～3cmの地山礫を含む。しまり良し。	29	にぶい黄褐色砂質土 (Hue10YR7/4) 地山礫を含む。しまり良し。
				30	にぶい黄褐色砂質土 (Hue10YR7/4) 地山礫を少量含む。しまり良し。
前庭部に関連する土層					
31	浅黄褐色砂質土	(Hue10YR8/3)	地山礫をほとんど含まない。やや粘質。	36	黄褐色粘質土 (Hue10YR8/8) 5cm以上の地山礫を多く含む。しまり良し。床面を構成する層。
32	明黄褐色粘質土	(Hue10YR7/6)	地山礫を含まない。しまり良し。	37	黄褐色粘質土 (Hue10YR8/8) 地山礫を少量含む。しまり良し。床面を構成する層。
33	浅黄褐色砂質土	(Hue10YR8/3)	5cm程度の地山礫を多く含む。	38	黄褐色粘質土 (Hue10YR7/8) 5cm以上の地山礫を多く含む。
34	黄褐色粘質土	(Hue10YR8/6)	地山の小礫を少量含む。しまり良し。		
35	浅黄褐色粘質土	(Hue10YR8/4)	34層と同質だが、比較的地山礫の割合が少なくしまり悪し。		

第10図 5号墳調査区平面図・断面図（2）

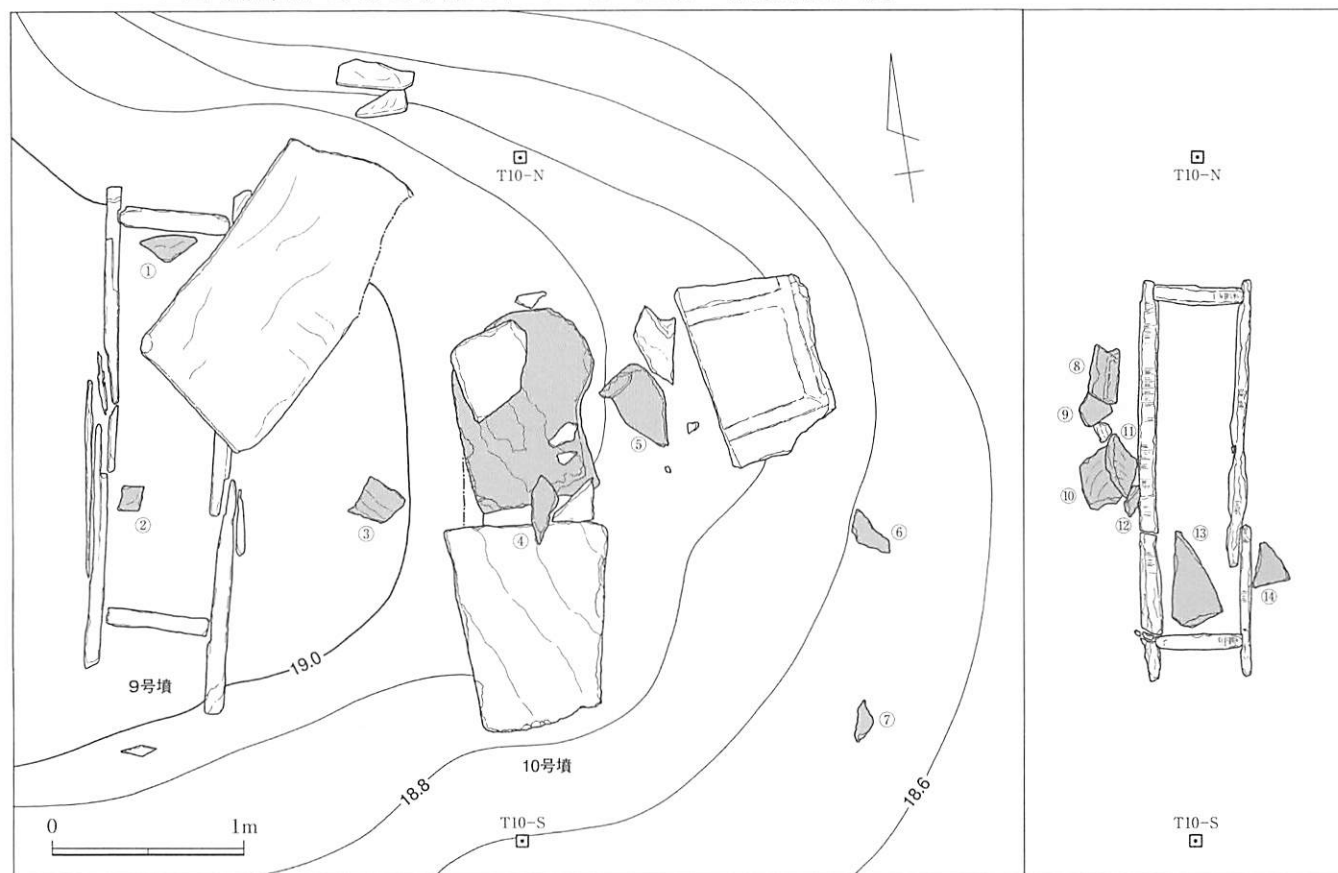
四 10号墳の調査成果

1. 過去の調査と今年度の調査目的

現状 10号墳は東尾根東端の頂部、8号墳から東に20mの地点に位置する箱式石棺である。西側には9号墳が隣接している。10号墳と9号墳は、主軸間距離が約2mでありほぼ平行に構築されていることから、密接な関係をもって築かれたと推測されている（森編2005）。

過去の調査 10号墳における調査は、これまで4回にわたって行われている。最初に行われたのは、1955年の玉名高等学校考古学部による調査である。この時、石棺内から4体の人骨が検出され、それらの頭位方向は3体が北、1体が南であったという。副葬品は出土していない（田辺1955 a・1955 b）。その後、上天草市によって、2004年度には現状実測図の作成が行われ、2006年度には石棺構造および構築過程の解明を目的とした発掘調査が行われた（森編2005、三好・仙波編2007）。その結果、墓壙の切り合い関係から9号墳の後に10号墳が築造されたことや、墓壙がテラス面を造り出す二段墓壙であることが判明した。また、北側棺外テラス面から器種不明のものを除き、直刃鎌、無肩の袋状鉄斧、鉈、刀子の鉄製ミニチュア農工具が検出されるという成果もあった。これにより、10号墳は古墳時代前期後半から中期前半に築造されたと考えられた。この鉄製ミニチュア農工具に関して、袋状鉄斧・鉈・刀子のセットを含む4種類以上の農工具を副葬するパターンは、近畿地方を中心とした画一的な組成であるとの指摘もある（寺沢1979）。よって、10号墳の築造者は、近畿地方中央部と葬送儀礼に関する情報を共有していた可能性があると考えられている（三好・仙波編2007）。

鉄製ミニチュア農工具



第11図 10号墳北側蓋石破片散布状況図（左：棺蓋取り上げ前、右：棺蓋取り上げ後）

2006年度の墓塚調査は、四方向の断ち割り区を除いて、上段墓塚の埋土上面を検出したにとどまっていた。そのため2007年度には、棺外未発掘部分における副葬品有無の確認を目的として調査が実施された。その結果、西側棺外テラス面上から砂岩石材片が検出された。これは石棺石材の調整を行った残滓であると考えられている。また、石棺の棺内面にはベンガラ塗布が、石棺の棺身・棺蓋には石材加工痕が確認された。さらに調査終了後の整理作業において、

北側蓋石接合石材

上段墓塚埋土上面および石棺周囲に散在していた石材が北側蓋石の欠損部と接合することが判明した(第11図)。北側蓋石は、1955年の調査時の写真では欠損していないように見受けられるため、1955年の調査時、あるいはそれ以降に破損したと推測される(山野・有馬編2008)。

調査目的

昨年度の整理作業では接合した状態における北側蓋石の記録作業を行えていなかったため、今年度の調査は、その俯瞰写真撮影および実測図作成を目的として実施された。(田中)

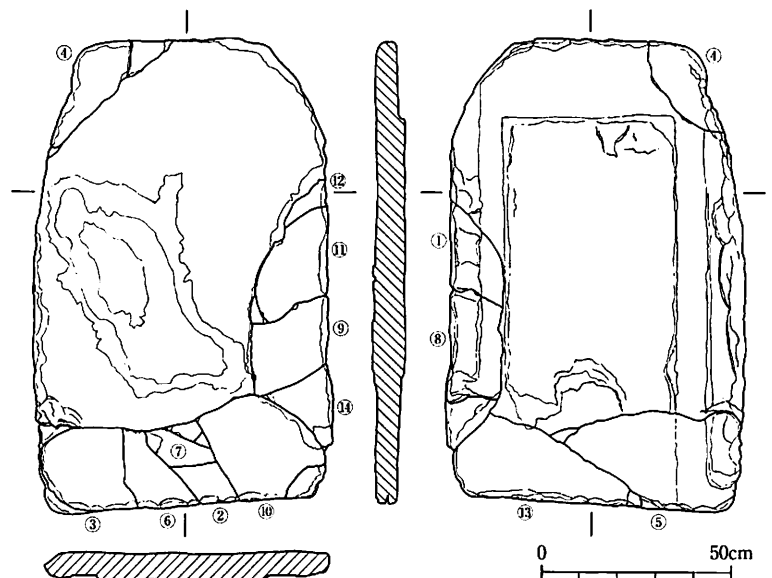
2. 調査成果

散布石材の接合によって、北側蓋石はほぼ完形に近い状態となった(第12図)。復元後の蓋石の大きさは、長さ125cm、幅80cm、厚さ8.5cmを測る。北側蓋石裏面は、その大部分が石材の節理に沿って剥離しており、本来の面をとどめていない。そのため、明瞭な加工痕は観察できなかった。接合石材(第12図⑤)については、矩形の掘り込みの周囲が剥落しているが、加工の痕跡が残っている。そのため、ここに矩形凹状加工が施されていたことは明らかである。側面のほとんどは、風化のため加工痕が不明瞭であった。ただし、北側蓋石南合わせ面には明瞭な加工痕がみられる。ここはチョウナ叩きによって平滑に整えられている。加工は一定の間隔で連続的に行われており、その方向は石材の長辺に直交している。今回観察されたチョウナ叩き痕は、前年度に南側蓋石北合わせ面にみられたものと同様である。

加工痕

2枚の蓋石を棺身上に据えたところ、矩形凹状加工の施された棺蓋と棺身、また2枚の蓋石は隙間なく組み合わせることが明らかとなった。蓋石裏面矩形凹状加工部の内辺の大きさは、南北蓋石合わせて長さ174cm、幅44cmである。これに対して、棺身の内法は長さ176cm、幅46cmである。したがって、凹状加工の内辺は棺身の内法に合わせて加工が行われたことが分かる。また凹状加工の幅は6.5~12cmであるのに対し、棺身石材上端面は厚さ5~11cmである。凹状加工はいずれの部分も、1~4cm程度棺身石材より加工の幅が広くなるように調整されており、石棺を嚴重に密閉しようとした意図が感じられる。また、前述したように、2枚の蓋石の合わせ面にも、精緻な加工が施されており、湾曲が一致するように整形されている。こうしたことから、蓋石裏面の矩形凹状加工は棺身石材上端面の長さや厚さに合わせて施されたと想定される。したがって、蓋石の加工は棺身構築後にその近くで棺身の形状に合わせて行われたものと考えられる。また、加工は非常に丁寧になされており、その精緻さから加工技術の高さがうかがえる。(簡)

棺蓋設置状況



第12図 10号墳北側蓋石実測図

(左：表面、右：裏面、図の上が北方向)

五 25号墳の調査成果

1. 石棺の現状と過去の調査

25号墳は北尾根の北端頂部に位置し、南東約10mの地点には26号墳が所在する。

過去の調査

1955年に玉名高等学校考古学部によって千崎丘陵の第1次調査が行われた。この調査で25号墳の存在が確認され、当時は20号墳と呼称されていた。2004年の3・4月には上天草市によって第2次調査が行われ、千崎丘陵全体の測量調査と古墳の分布調査が実施された。この調査時に新たな古墳が発見されたため、20号墳から25号墳へと名称が変更されている。また、同年

現状

8・9月には第3次調査が実施され、25号墳の現状実測図が作成された。この時点で地表に露出していたのは、東西方向を長辺とする長さ86cm、幅18cmの石材と、その石材の東端付近に直交するように並んでいる石材片のみであった。これらの石材には、千崎丘陵上にある他の箱式石棺のような精緻な加工は施されていないが、石材の配置から箱式石棺の南長側石と東小口石が残存しているものと判断された（森編2005）。

調査目的

ただし、東小口石と考えられる石材は風化が激しく、細かく砕けているために地山礫である可能性も指摘されていた。そこで今年度の調査は、25号墳の実態と構造の解明を目的として実施された。（汐除）

2. 調査区の設定と調査経過

調査区設定

今年度の調査では、第2次調査時に設定した測量杭が失われていたため、新たに杭を設定した。まず、露出している石材から主軸と考えられるラインを定め、その東側にT25-Eを、そこから西5mの地点にT25-Wを設定した。また、T25-Eの西2mの地点から南北それぞれ2mの地点に、T25-S、T25-Nを設定した。T25-S・T25-Nラインは主軸と直交する。なお、調査区はT25-Eから1mおよび3mラインを東西の辺とし、主軸から南北にそれぞれ1mのラインを南北の辺とする2m四方に設定した。さらに、主軸から北へ20cm、T25-N・T25-Sラインから西へ20cmの範囲はベルトとして残した。

調査経過

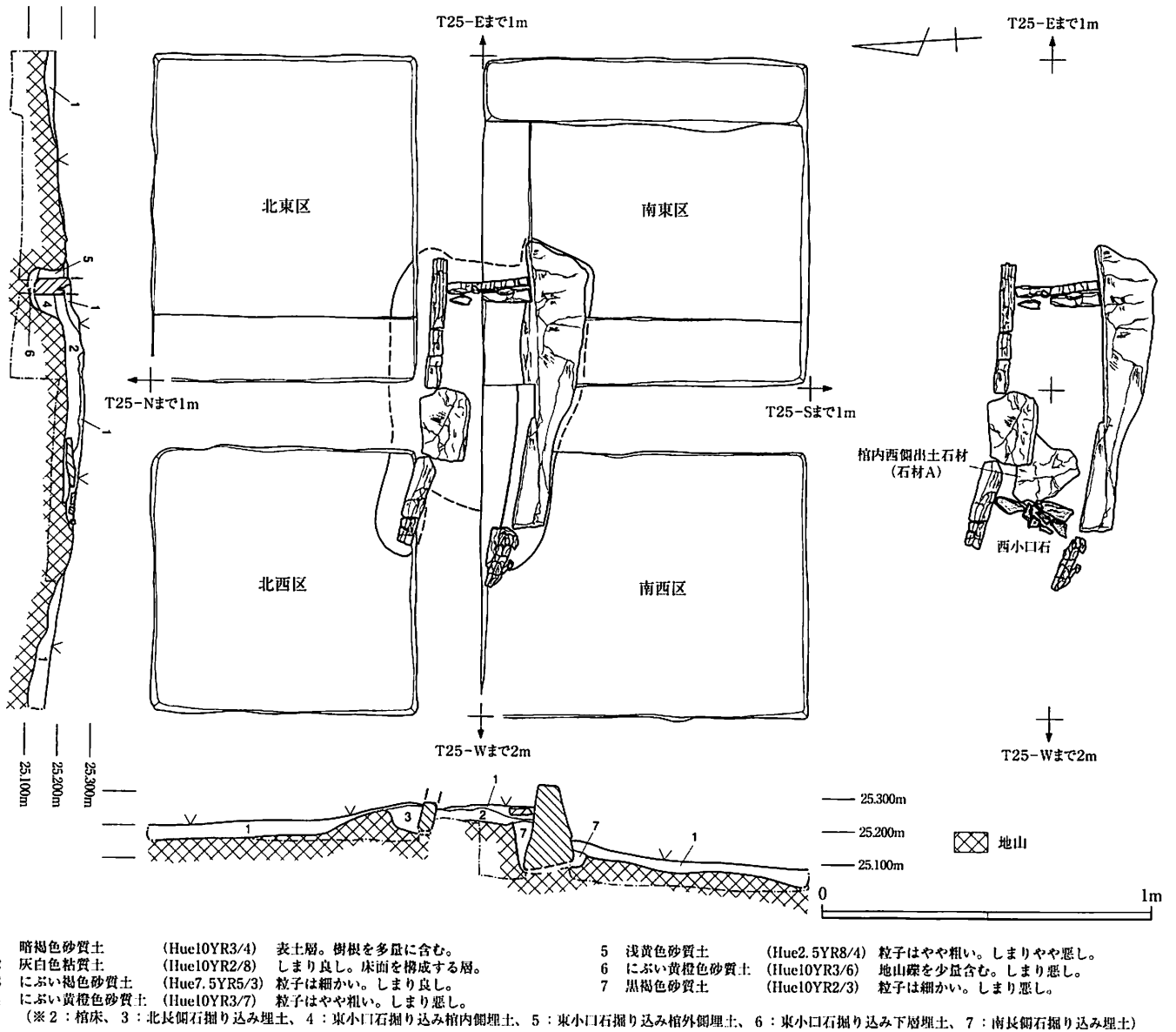
調査区内の表土を取り除いた結果、過去の調査では存在が明らかになっていなかった、北長側石と西小口石らしき石材が検出された。また、棺身石材に沿った掘り込みもこの段階で確認されている。さらに、棺外のベルトに沿って断ち割りを行ったところ、掘り込み埋土が両長側石の下に入り込んでいることが判明した。続いて、原位置を保っていない棺内の石材を除去しながら掘り下げを行い、倒れていると考えられる西小口石を取り上げた。さらに、東西両小口部の構造を解明するために、棺内南東区および棺内南西区の断ち割りを行った。

調査終了後、取り上げた石材は大学に持ち帰り、調査区は川砂と廃土を用いて調査前と同様の状態に埋め戻した。（中原）

3. 箱式石棺の構造（第13図）

（1）棺身

25号墳は、石材の状況などから箱式石棺の南長側石と東小口石が残存していると判断されていた（森編2005）。今年度の発掘調査によって、新たに北長側石と西小口石らしき石材が検出され、箱式石棺であることが確定した。25号墳の主軸方向はN85.9°Wである。千崎古墳群ではほとんどの埋葬施設の主軸が尾根筋に直交するが、25号墳は尾根筋と平行に構築されており



第13図 25号墳調査区平面図・断面図

特異な存在である。長側石と小口石の組み合わせ方は、同丘陵上に所在する箱式石棺の多くと同様、H字形になっているが、削り込みなどの精緻な加工はみられない。

棺身石材は風化が著しいが、南長側石のみ良好に残存している。これは、その他の石材が砂岩であるのに対し、南長側石は安山岩であるという材質の違いによるものと考えられる。なお、近接する26号墳も安山岩を用いて構築されており、何らかの関連が想定される。南長側石は整った板石状には加工されておらず、割れ面を残す。ただし上面は水平になっており、現在では旧状をとどめない他の棺身石材も、同じ高さまで存在し面を形成していた可能性がある。このことから蓋石の存在も考えられるが、現状では確認できない。また、南長側石の西側には現状で長さ18cm程度の石材が存在しており、南長側石の延長線上に設置されている。この石材は南長側石以外の棺身石材と同質であり、南長側石設置後、北長側石と長さを揃えるために置かれた可能性がある。

北長側石は、厚さがほぼ均一な3枚の石材で構成されている。いずれの石材も若干棺内側へ傾いている。特に中央の石材の傾きは著しく、後世に倒れたと考えられる。

小口石 東小口石は1枚で構成されており、北長側石と同様に厚さが均一な板状の石材を用いている。一方、西小口石については、他の棺身石材のような板状の石材は確認されなかった。しかし、西小口石があったと推定される位置から同質の石材片が集中して検出され、その下には地山を若干掘り込んだ形跡もみられたため、これらを西小口石であると判断した。よって、25号墳は、内法で長さ64cm、幅27cmの非常に小さい箱式石棺であるといえる。

棺床 棺内には、地山上に緻密な灰白色粘質土（2層）が敷かれており、この層の上面が棺床だと考えられる。樹根などによる攪乱で部分的に凹凸がみられるが、棺床の標高は25.266mである。南長側石上端面の標高が25.335mであるため、石棺上面がこの高さに揃えられていたと考えると、棺内高は約7cmと非常に浅いことになる。

掘り込み 25号墳では、棺身石材の形状に沿うように地山を掘り込んでいる状況が確認された。南長側石を据えるための掘り込みには、しまりの悪い土（7層）が充填されている。7層は棺身石材の下にも敷かれており、石材を設置する前にも入れられていたことが分かる。また北長側石を据えるための掘り込みでも、同様に埋土が石材下に入り込んでいる状況が確認された。南長側石上端が水平面をもつことから、棺身石材上端面を水平に調節するという目的があったと想定できる。

東小口石を据えるための掘り込み埋土の状況は、両長側石とはやや異なっている。石材下には地山礫を含む土（6層）が比較的厚く入れられており、その上に他の石材の掘り込み埋土と似た土（4・5層）が充填されている状況が確認された。6層は、棺身上面の高さを揃えるために入れられたと考えられる。

（2）石棺内出土石材

棺内西側出土石材 25号墳では、棺内から石材が多量に出土している。ほとんどの石材は砂岩であり、北長側石や東小口石が風化によって割れ、棺内に転落したものと考えられる。唯一、棺内西側から出土した石材（第13図右の石材A）のみが安山岩である。他の棺内出土石材に比べて大きく、厚さ1cm程度の板状に加工されているように見受けられる。千崎古墳群で用いられている砂岩は近隣で産出するものであるとされているが、この安山岩については天草のものではないのご教示をいただいております。一部の石材は遠方から持ち込んでいる可能性もあると考えられる。

石材Aは、棺床とほぼ同じレベルで水平に検出されたことや、傾いてはいるが原位置から大きく動いてはいないと考えられる北長側石の下に存在したことから、本来の位置を保っている可能性もある。

（3）構築過程

以下では今年度の調査成果に基づいて25号墳の構築過程について述べる。

石材同士の関係 25号墳では、墓壙はみとめられず、各棺身石材の形状に合わせた掘り込みのみが確認された。断面を観察したところ、南長側石を据えるための掘り込みおよび埋土が、東小口石を据えるための掘り込みに切られており、南長側石を据えた後で、東小口部の掘り込みを行ったと考えられる。南長側石と東小口石の関係に加え、石材の大きさや材質が他とは異なることなどから判断すると、南長側石が最も早い段階で設置された可能性が高いが、調査範囲の関係で北長側石の構築については不明な点が多い。掘り込みに据えられた石材の下には土が充填されており、石材を設置する際に石材上端面の高さや角度を調整していたと考えられる。

棺身の調整

棺身石材設置後は、棺内地山面上に白色土が敷かれ棺床が構築されている。 (田上)

4. 天草地域の箱式石棺

箱式石棺は弥生・古墳時代を通してみることができる墓制であり、全国的に広く分布している。古墳時代の箱式石棺は、長軸方向の内法が140～210cmに集中するため、それより短いものを小型の箱式石棺とする（島津屋2007）。25号墳は内法で長さ64cmと非常に小さな箱式石棺であり、千崎古墳群の他の箱式石棺と比べて石材の加工が粗い。

箱式石棺

古墳時代の天草は、埋葬施設の分布と時期的変遷から南北二つの地域に分けることができる。一方を、宇城市三角町の西半分から上島北東海岸以北までの「大矢野・松島地域」、もう一方を上島南半部と下島、長島、それらの対岸の島々を含む「上島南半以南地域」とする。「上島南半以南地域」には小型の箱式石棺が多く存在し、その代表例として上島の宮崎石棺墓群や長島の明神下岡石棺墓群が挙げられる。

地域区分

第14・15図に示した通り、両地域における箱式石棺の規模には明らかな違いがある。

「大矢野・松島地域」の箱式石棺は、千崎25号墳を除いてほとんどが標準的な大きさである。第14図で唯一25号墳と同程度の規模を示すのは丸子島1号石室である。これは石棺系石室という別の墓制であり、整った板状の石材を用いて丁寧に構築されている点は千崎25号墳と異なっている。しかし、千崎古墳群ときわめて近い立地であり大きさも似ているため、その存在を等閑視することはできない。

大矢野・松島地域

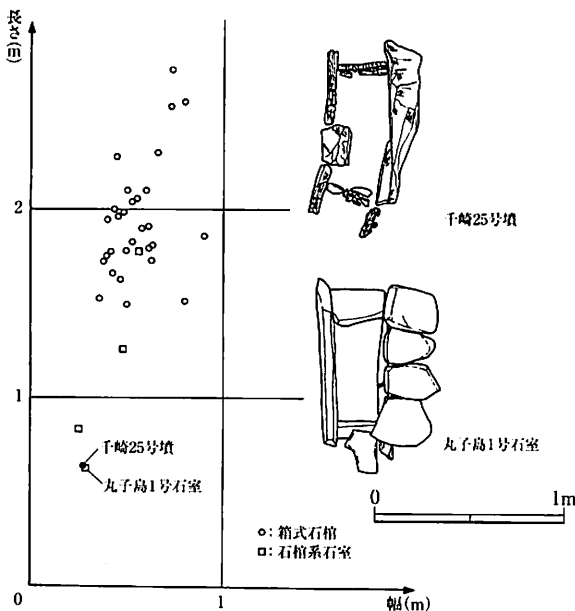
一方、「上島南半以南地域」に所在する箱式石棺には小型のものが多く、標準的な大きさの石棺があまりみられない。こうした傾向は当該地域の特徴であると考えられる。前述した明神下岡石棺墓群は一部が地下式板石積石室墓の祖形であるとされており（戸崎・牛ノ浜・宮田1986）、宮崎石棺墓群もそれに類するという指摘もある（杉井2007）。

上島南半以南地域

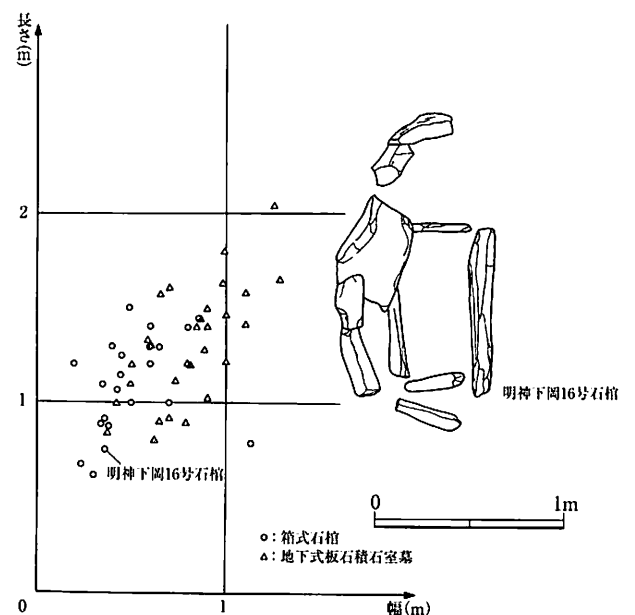
「大矢野・松島地域」と「上島南半以南地域」は相互に交流があったと考えられており、25号墳もそうした交流の中で築造されたという可能性が想定される。また、明神下岡石棺墓群と宮崎石棺墓群には弥生時代終末期～古墳時代初期という年代が与えられていることから、25号墳もこれと同時期か、そうでなくとも千崎丘陵に所在する他の箱式石棺よりも古い時期に築かれた可能性がある。

千崎25号墳の位置づけ

(松尾)



第14図 「大矢野・松島地域」の石棺等の規模



第15図 「上島南半以南地域」の石棺等の規模

六 まとめ

1. 調査成果

千崎古墳群ではこれまで7回にわたる調査が行われ、成果が挙げられてきた。本書では5号墳、10号墳、25号墳の調査について報告している。以下では今回の調査成果について簡潔にまとめ、これまでの成果と合わせて千崎古墳群の特徴を検討したい。

5号墳 5号墳は千崎丘陵の東尾根に位置する直径約6mの円墳である。主体部は横穴式石室であり、墳丘中央に構築されている。横穴式石室の主軸方向はN19°Eであり、東尾根筋と直交する。前庭部を含めた石室の全長は3.02mである。

前庭部は、長さ75cm、幅65cmを測る。床面は、礫を含む粘質土を羨門床石上面と同じレベルまで充填することで形成されている。前庭部側壁は羨道壁体前面に接するように構築されており、比較的大きな石材の上に自然石または割り石が平積みされている状況が確認された。

閉塞石は長さ70cm、厚さ4cm、現存する高さ50cmであり、板状に加工された砂岩が用いられている。今年度の調査で、閉塞石は上部だけでなく下端部も大きく欠損していることが判明した。こうした閉塞石下端部の欠損が後世の盗掘や改変に伴うとは考えにくい点や、欠損箇所に接合する石材が確認されなかった点などから、羨道を使用した追葬が行われた可能性が高いと考えられる。閉塞石前面には積み石がなされており、類似する構造は4世紀後葉と推定される福岡県の鋤崎古墳でも確認されている（杉山編2002）。

前庭部の墓壙は、その墓壙底の標高が玄室のものとはほぼ同じであり、前庭部側壁の外郭ラインに沿って掘り込まれている。よって、5号墳では当初から前庭部の構築を意識して墓壙の掘削が行なわれたと考えられる。また、墓壙の南端が一部掘り込まれており、前庭部の長さを画していた可能性がある。

構築過程 以下では、これまでの調査成果を踏まえて、5号墳全体の構築過程について考察する。

はじめに石室全体の墓壙の掘削と基底部の構築を行う。墓壙底に腰石を据えることで玄室のプランを、羨門床石を配置することで羨道の長さを確定している。玄室と羨道はそれぞれの壁体を構成する石材を共有しており、並行して構築されたことが分かる。しかし、羨道と前庭部は左壁体最下のL字形石材を除いて石材の共有がみとめられないため、構築手順における両者の関係は明らかにしがたい。よって、前庭部の構築過程については玄室・羨道とは区別して後述する。次に玄室および羨道の壁体構築が行われる。標高13.450mまでは石材が垂直に積み上げられ、その後持ち送りが開始されている。持ち送りのための隅角消しの石材が隣接する壁体に跨って配置されており、各壁体は同時に構築されたことが分かる。屍床仕切り石上面の高さも持ち送りが開始されるレベルとほぼ等しいため、この段階で据えられた可能性がある。石室の上半部は残存していないが、その後は持ち送りながら壁体が積みまれ、最後に天井石を配することで玄室が構築されたと考えられる。

前庭部では、羨門床石設置後に床面が形成されており、その上に前庭部側壁が構築されている。続いて石室の閉塞が行われたと考えられるが、前述した通り、今年度の調査で確認された閉塞状況は追葬後のものである可能性が高い。閉塞石を設置した後、前庭部床面直上に整地面が形成され、その上で何らかの行為に伴って火が使用されたと考えられる。最後に、石材と粘

質土を閉塞石前面に積むことで、石室の閉塞が行われている。

10号墳は、東尾根東端の頂部に位置する箱式石棺である。昨年度の整理作業中に、一部欠損していた北側蓋石に接合する石材片の存在が確認された。よって、今回の調査では石材接合後の北側蓋石の記録及び観察を行った。その結果、欠損していたため昨年度の調査で確認できなかった北側蓋石南側合わせ面の状況が明らかとなり、両蓋石の合わせ面はチョウナ叩きによってきわめて平滑に加工されていることが判明した。さらに、蓋石に施された矩形凹状加工と、棺身上面の大きさが一致することも明らかとなった。したがって蓋石の加工は棺身を構築した後、その大きさに合わせて施されたと推測される。以上の点から、10号墳の築造者が有していた石材加工技術の高さや、石棺の気密性を重要視していたことがうかがえる。

25号墳は北尾根の北端頂部に位置する箱式石棺である。第3次調査で現状実測図が作成されており、残存状況が悪いながらも、H字形に組み合わせられた南長側石と東小口石が露出している状況と判断されていた（森編2005）。今年度の調査は、25号墳の実態と構造の解明を目的として行われた。その結果、25号墳は長さ64cm、幅27cmのきわめて小型の箱式石棺であることが判明した。千崎古墳群で小型の箱式石棺は当古墳以外確認されていない。ただし、西側の小口石が原位置を保った状態では確認できなかったことや、西小口と東小口の構造が大きく異なっていることを考えると、石棺の西半が何らかの要因によって失われているという可能性も完全には否定できない。しかし今年度の調査では、現在確認されている棺身石材の西側に石棺が構築されていた痕跡は発見されず、周囲の地形にはそうした痕跡が全て失われるほどの削平を受けた様子もみとめられなかった。さらに、両長側石の西端部付近で地山が若干掘り込まれた状況が確認され、その直上から東小口石や北長側石と同質の石材片が検出されたことなどを加味して、25号墳を小型の箱式石棺であると判断した。

棺身石材で最も残存状態が良い南長側石は安山岩であり、それ以外の石材は砂岩である。墓壙はみられず、棺身石材に沿った掘り込みのみが確認された。安山岩を用いて構築されている点や、石材に精緻な加工がみとめられない点、石棺に沿った掘り込みを有する点などは近接する26号墳と共通しており、両者の間には何らかの関連があるものと推測される。（一本・高濱）

2. 古墳群の評価

5号墳の横穴式石室の構造には、狭小な羨道などの古い要素と、玄室床面と羨道床面のレベル差がほとんどないなどといった比較的新しい要素の両方がみとめられる。杉井健は、玄室や羨道の壁体が板石平積みである点、羨道の造り方が大戸鼻北古墳に類似する点、墳丘調査などでも須恵器が検出されていない点などから、5号墳の時期を古墳時代中期前葉から中葉と推定した（杉井2007）。またこれまでの調査で、箱式石棺が石室墳に先行して築かれた可能性が指摘されており、10号墳については鉄製ミニチュア農工具の出土などから、古墳時代前期後半から中期前半という年代が与えられている（三好・仙波2007）。

今年度、はじめて発掘調査が行われた25号墳は、主軸方向や大きさ、石材加工技術などの点で、10号墳を含めた千崎古墳群のその他の箱式石棺とは大きく異なっている。小型の箱式石棺は天草上島南半以南地域に多くみられ、25号墳もこうした南方からの影響を受けて築かれた可能性が指摘できる。さらに、上島南半以南地域の小型の箱式石棺は古墳時代のきわめて早い時期の所産であると考えられているものが多いことから、25号墳は千崎古墳群の中でも古い段階で構築された可能性がある。（一本・高濱）

参考文献

- 石野博信他編 1991『古墳時代の研究』8 古墳Ⅱ 副葬品 雄山閣
- 宇野楨敏 2008「北部九州における古墳時代後期の装身具」『後期古墳の再検討』第11回九州前方後円墳研究会発表要旨・資料集 九州前方後円墳研究会：pp. 135-148
- 大賀克彦 2002「弥生・古墳時代の玉」『考古資料大観』第9巻 弥生・古墳時代 石器 石製品 骨角器 小学館：pp. 313-320
- 島津屋寛 2007「熊本県内の古墳時代箱式石棺に関する一考察」熊本大学文学部2006年度卒業論文
- 杉井 健 2007「古墳時代の大矢野」『上天草いにしへの暮らしと古墳』上天草市史大矢野町編1 熊本県上天草市：pp. 123-345
- 杉山富雄編 2002『鋤崎古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第730集 福岡市教育委員会
- 田辺哲夫 1955 a 「玉名高等学校考古学部の天草郡雑和古墳群調査結果について」 熊本県立玉名高等学校
- 田辺哲夫 1955 b 「天草郡大矢野町雑和古墳群調査概要」 熊本県立玉名高等学校
- 寺沢知子 1979「鉄製農工具副葬の意義」『樫原考古学研究所論集』第四 吉川弘文館：pp. 347-373
- 戸崎勝洋・牛ノ浜修・宮田栄二 1986『明神下岡遺跡』長島町埋蔵文化発掘調査報告書(1) 鹿児島県出水郡長島町教育委員会
- 前田真山子編 2006「千崎古墳群第4次調査報告」『上天草市史大矢野町編資料集』2 上天草市：pp. 1-26
- 三島 格・高木恭二編 1987『浜ノ洲貝塚・丸子島古墳』熊本日日新聞社・熊本県宇土郡三角町
- 三好栄太郎・仙波靖子編 2007「千崎古墳群第5次調査報告」『上天草市史大矢野町編資料集』3 上天草市：pp. 1-36
- 森幸一郎編 2005「千崎古墳群第2次・第3次調査報告」『上天草市史大矢野町編資料集』1 上天草市：pp. 1-38
- 山野ケン陽次郎・有馬絢子編 2008「千崎古墳群第6次調査報告」『考古学研究室報告』第43集 熊本大学文学部考古学研究室：pp. 1-36
- 和田晴吾 2006「石造物と石工」『専門技能と技術』列島の古代史5 岩波書店：pp. 53-91

第2部

桐ノ木尾ばね古墳測量調査報告



桐ノ木尾ばね古墳測量調査風景（第3次調査）

一 位置と歴史的環境

1. 桐ノ木尾ばね古墳の位置

桐ノ木尾ばね古墳は、熊本県上天草市大矢野町維和桐ノ木に所在する。同古墳は千崎古墳群（本書第1部参照）が所在する丘陵（千崎丘陵）に連なる丘陵上に位置している（第16・17図）。 古墳の位置

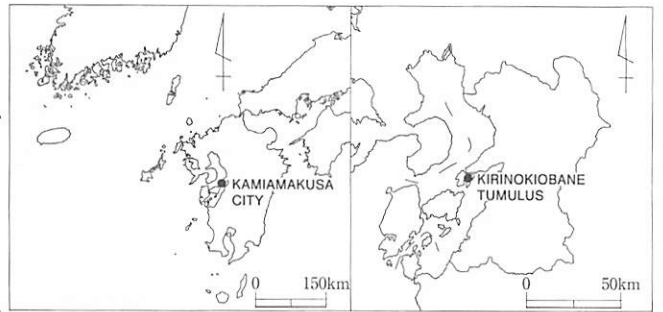
2. 天草地域における古墳築造の動態

古墳時代における天草地域は埋葬施設の分布と時期的変遷から、北部の大矢野・松島地域、南部の上島南半以南地域とに分けることができる（杉井2007）。 古墳時代の天草地域

天草地域の古墳時代を概観するにあたって宇土半島基部地域との関連性を示すことは重要である。なぜなら宇土半島基部地域には古墳時代前期を通じて前方後円墳が築造されており、その後も横穴式石室の導入や馬門石製石棺の輸送などがみられ、古墳時代を通じて熊本県域の中でも有力な地域であったと考えられるためである。

古墳時代前期の宇土半島基部地域には熊本県地域で最古相の前方後円墳である城ノ越古墳が築造されている。当古墳には古相の三角縁神獣鏡が副葬されており、畿内政権との強い関連性が想定されている。宇土半島基部地域にはこの後も当時期最大の墳丘規模を誇るスリバチ山古墳や銅鏡、車輪石といった豊富な副葬品が出土した向野田古墳などの前方後円墳が築造されている。一方、大矢野・松島地域では前期後半にミニチュア鉄器が棺外に副葬された千崎10号墳などの箱式石棺が築造されるが、前方後円墳は築造されていない。 古墳時代前期

古墳時代中期には横穴式石室の構築が開始される。中期前半には宇土半島の有明海沿岸部に城1・2号墳やヤンボシ塚古墳が築造される。これらのうち最も古く位置づけられる城2号墳は北部九州に類例のある竪穴系横口式石室であるのに対して、時期的に後続する城1号墳、ヤンボシ塚古墳は石障や窮隆状天井が特徴的な肥後型横穴式石室である点が注目される。また大矢野・松島地域でも横穴式石室を内部主体とする円墳の構築が開始される。当時期の天草地域には依然として前方後円墳の構築はないが、石障に直弧文が施され、鉄矛が副葬された長砂連古墳や天草地域で唯一埴輪を有し、横刃板鋌留短甲が副葬されたカミノハナ古墳群が築造されており、畿内政権との密接な関係があったものと思われる。なお、装飾古墳である大戸鼻古墳群、広浦古墳、長砂連古墳は海に面しており、互いに見渡せる位置に築造されている。 古墳時代中期



第16図 桐ノ木尾ばね古墳の位置

古墳時代後期になると大矢野・松島地域では大矢野島北西部に横穴墓群が築造されているものの、古墳築造は相対的に衰退していく。これに対し、これまで古墳が築造されていなかった上島南半以南地域に古墳の分布が集中するようになる。このように後期には横穴式石室墳築造の中心が大矢野・松島地域から上島南半以南地域に移動したと考えられる。（松崎）



第17図 桐ノ木尾ばね古墳と千崎古墳群

二 調査経過

1. 過去の調査

第1次調査 桐ノ木尾ばね古墳は、1955年に玉名高等学校考古学部によって最初の調査が行われた（第1次調査）。第1次調査では並存する2つの石室が確認され、これらのうち北側の竪穴式石室が発掘調査された。石室内からは人骨1体、石室北東隅と南西隅で鉄斧各1点、北西隅から勾玉2点と管玉12点が出土した（田辺1955）。人骨については2006年に詳細な報告が行われ、性別は女性で、西北九州弥生人と共通した特徴であるとされた（中橋2006）。この後上天草市史大

人骨の報告 矢野町編纂事業の一環として2006年に上天草市教育委員会が石室の現状実測調査を行った（第2次調査、第21図上段右）。また第1次調査で出土した遺物のうち、所在が判明した玉類の整理作業を行った（桐ノ木尾ばね古墳出土として保管されていた管玉を含む）。第2次調査では北側石室出土の玉類から築造時期を古墳時代中期前半としている。また上天草市成合津2号墳と当古墳の石室構造を比較し、石材の積み方などの構造的な違いについて言及した。半壊している南側石室については残存している石室石材の配置から、石棺系石室である可能性が高い

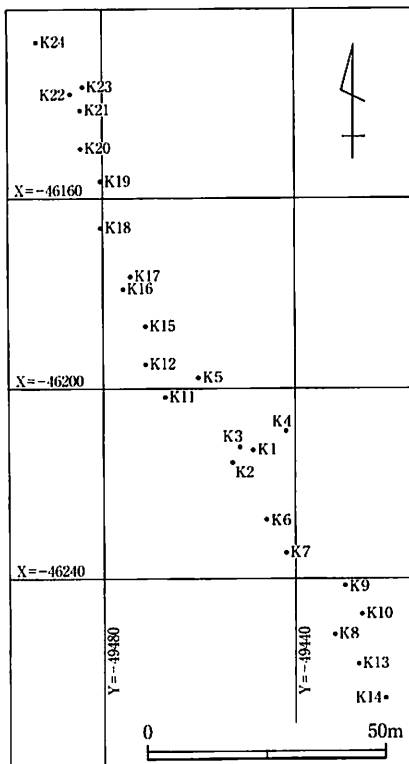
第2次調査 として（三好編2007）。 （山野）

2. 第3・4次調査

第2次調査では石室の実測までで調査が終了しており、周辺地形の測量が課題として残っていた。また桐ノ木尾ばね古墳の周辺地形測量は本古墳の立地を明らかにするだけでなく、近接する千崎古墳群と比較することで、当地域における古墳築造地の選定や時期的特徴を明らかにすることができるのではないかと考えられた。そこで熊本大学考古学研究室では桐ノ木尾ばね古墳周辺地形の測量調査を2007年（第3次調査）から2008年（第4次調査）にかけて行った。

第3次調査では第2次調査で設定されたK1・K2を主軸とし、トータルステーションを用いた開トラバース測量によって測量基準点を設定した（第18図・第5表）。そして畑として利用されている部分から南側の斜面までの測量を行った（第19図）。

第4次調査では畑として利用されている部分よりも北側の測量を行った。そして尾根の最高点から北へ下る斜面までの部分を測量し調査を終了した（第20図）。



第18図 測量基準点の配置

測量は平板測量で、縮尺100分の1、25cm間隔の等高線を描いた。（南）

第5表 測量基準点の国土座標

基準点名	X座標 (m)	Y座標 (m)						
K 1	-46213.149	-49448.784	K 9	-46241.527	-49429.728	K17	-46176.607	-49474.282
K 2	-46215.687	-49453.088	K10	-46247.557	-49426.172	K18	-46166.271	-49480.377
K 3	-46212.44	-49451.523	K11	-46195.44	-49443.523	K19	-46156.271	-49480.469
K 4	-46209.085	-49441.893	K12	-46194.971	-49471.112	K20	-46149.38	-49484.532
K 5	-46197.799	-49460.158	K13	-46258.184	-49426.847	K21	-46141.381	-49484.606
K 6	-46227.748	-49445.98	K14	-46265.289	-49421.324	K22	-46137.935	-49486.638
K 7	-46234.639	-49441.916	K15	-46186.972	-49471.186	K23	-46136.411	-49484.054
K 8	-46251.867	-49431.757	K16	-46179.219	-49475.758	K24	-46126.994	-49493.657

三 測量調査の成果

1. 桐ノ木丘陵の地形と現状

桐ノ木尾ばね古墳は舌状に伸びる丘陵上に築造されている（第21図上段左。以下、この丘陵を桐ノ木丘陵と呼称する）。桐ノ木丘陵は横断面が蒲鉾形を呈しており、古墳はこの蒲鉾形の頂部に築かれている。丘陵は南側から北側に向かって伸びており、北側は現在道路で分断されているが、元々は千崎丘陵と一体のものであったと思われる（第17図）。この丘陵分断部分は標高が低くなっており、これより北側（千崎丘陵側）はまた標高が高くなっていく。石室の周辺は畑や蜜柑畑として利用されており、現在はほぼ平坦となっている。この改変部分より南側は徐々に標高が上昇していく。また改変部分から北側はゆるやかに標高が高くなっていく。なお改変されている部分はほぼ平坦になってはいるが、北側に向かってわずかに標高が上昇している。つまり桐ノ木丘陵は南側から北側に向かって下り、石室周辺を境に北側に向かってゆるやかに標高が高くなっていくのである。

丘陵の現状

古墳の周囲は上述のように後世の著しい改変を被っており、石室を覆っていたと考えられる盛土、古墳に伴う埴輪や土器等はみられず、石室石材も原位置を留めていないものが非常に多い。このように現状では古墳築造当時の面影はみられない。特に石室については第2次調査段階では南側石室の内部を見ることはできなかったが、その後の経過により南側石室の一部が崩落し、棺内床面と考えられる部分が露出してしまっている。また本来は棺内に存在したであろう人骨や、朱が付着した石室石材も散見される。現在はブルーシートで覆い保護されているが、早急な対策が必要である。

後世の改変

2. 古墳の立地と旧地形の復元

桐ノ木尾ばね古墳はこれまでの報告等において「丘陵の頂部」に位置しているとされてきた（三好編2007・杉井2007）。桐ノ木尾ばね古墳が所在する維和島の古墳時代前期から中期における古墳立地をみると、広浦古墳や千崎9・10号墳・11号墳・4号墳・22号墳・25号墳・26号墳等が丘陵の頂部や先端に位置しており、維和島と大矢野島に囲まれた海峡や八代海、有明海に抜ける三角瀬戸を見渡すことができる。また維和島周辺でも長砂連古墳、大戸鼻古墳群、カミノハナ古墳群など丘陵の先端や丘陵頂部に築造されている古墳が非常に多い。しかしこれらとは異なり千崎5・6・7・12・23号墳などは丘陵の鞍部または斜面に築造されており、丘陵頂部に古墳を築造することが天草地域における古墳築造における選地の特性であるとは言い切れない状況である。

これまでの古墳立地について見解

では桐ノ木尾ばね古墳が築造された位置を詳しくみていこう。古墳の周辺は現在畑として利用され、地形が大きく改変されているため、古墳築造時の地形や石室の構築過程を明らかにすることは極めて困難である。しかし改変されている範囲以外の部分から旧地形を想定することは可能である。そこでまず旧地形の復元をおこない、そこから古墳築造時の丘陵の姿や古墳の立地、石室構築過程を考えてみたい。

測量調査の結果、桐ノ木丘陵の最高点は古墳が築造されている位置から北へ約84mの位置にあり、標高は32.159mであることが明らかとなった（第21図）。また現状で地形の改変が及んでいない部分は北が標高29.000m、南が標高28.500m付近までであると考えられる。桐ノ木尾

古墳の立地と旧地形の復元

ばね古墳が位置する丘陵はそれほど細かいアップダウンはなくなだらかであり、かつては連続していたと考えられる千崎丘陵も同様な状況である。このため現在改変されている部分に極端な地形の凹凸があった可能性は低い。未改変部のレベルは北側のほうがやや高くなっており、現状の丘陵最低点が約25.750m（K 7 南側）であることから、旧地形の丘陵最低点は石室の南側に存在したと考えられる。また石室の最高点は現状で29.000mであり、石室最高点は丘陵最高点（32.159m）よりも約3m低い位置にある。このことから古墳は丘陵の頂部ではなく鞍部に築造されていたものと考えられる。さらに石室最高点が29.000mであり、石室構築後に盛土が行われたとしても、丘陵最高点を超えるほどの盛土が施されていた可能性は低いと考えられる。このことから古墳築造後の地形は丘陵鞍部に高まりがあるという状況であったと想定される。

次に古墳の現状と石室の構築過程から旧地形について考えてみたい。まず現状の石室最低点のレベルは約28.200mである。これを旧地形と照らし合わせてみると、丘陵最低点が石室南側に存在することから、石室は南側から北側に向かって緩やかに上昇する斜面に構築されたものと考えられる。また現在露出している石室石材のうち最下部のものは石室構築における墓壙底付近を示していると考えられ、墓壙掘削前の地山面はこれよりも高い位置にあったと思われる。この点については旧地形の地山面のレベルを復元することが極めて困難であることから想定の域を出ないが、横穴式石室である千崎5号墳は地山を65cm以上掘り込んだ後に石室基底が構築されており（山野・有馬編2008）、箱式石棺である千崎10号墳も60cmほどの深さの墓壙を掘り込んだ後に石棺が構築されている（三好・仙波編2007）ことから、桐ノ木尾ばね古墳の石室構築においても墓壙を掘り込んだ後に下部から石材を積み上げていったものと考えられる。このように千崎古墳群の調査事例を参考に60～70cmの墓壙を掘削したと考えたとすると、墓壙掘削前における地山面の標高は約28.800mであったと思われる。これは未改変部分から復元した旧地形の標高や地形とも矛盾するものではない。

最高点付近

なお上述のように最高点付近から北側は徐々に標高を下げていく。最高点付近は現在周囲を木々に囲まれているが、ここからは八代海を見渡すことができ、千崎10号墳が築造されている位置と同じような状況である。しかしこの場所は表土が極めて薄く、地山が表出している部分もある。また東側は急激な崖となっていることから、この場所に古墳が存在する可能性は低いように思われる。

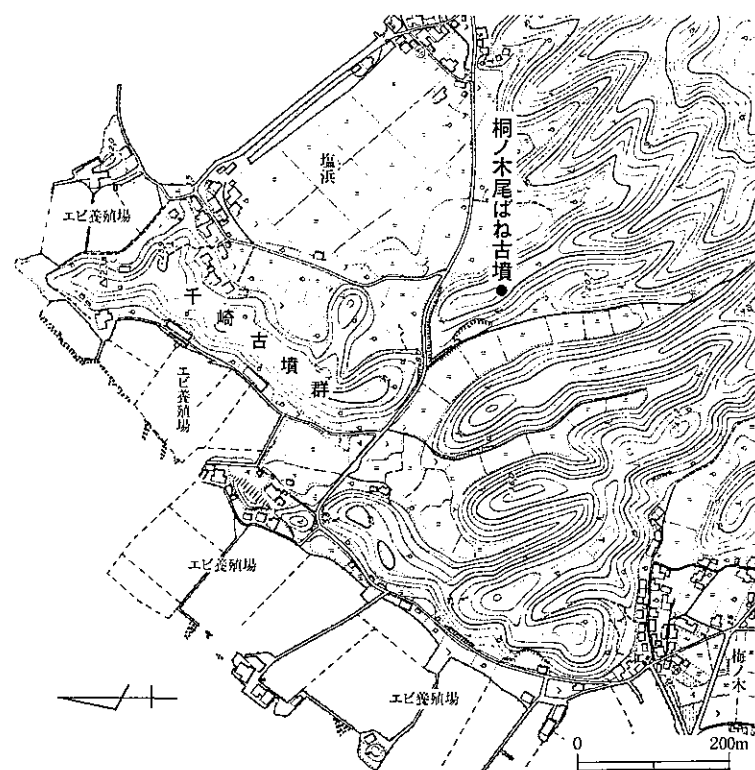
(南)



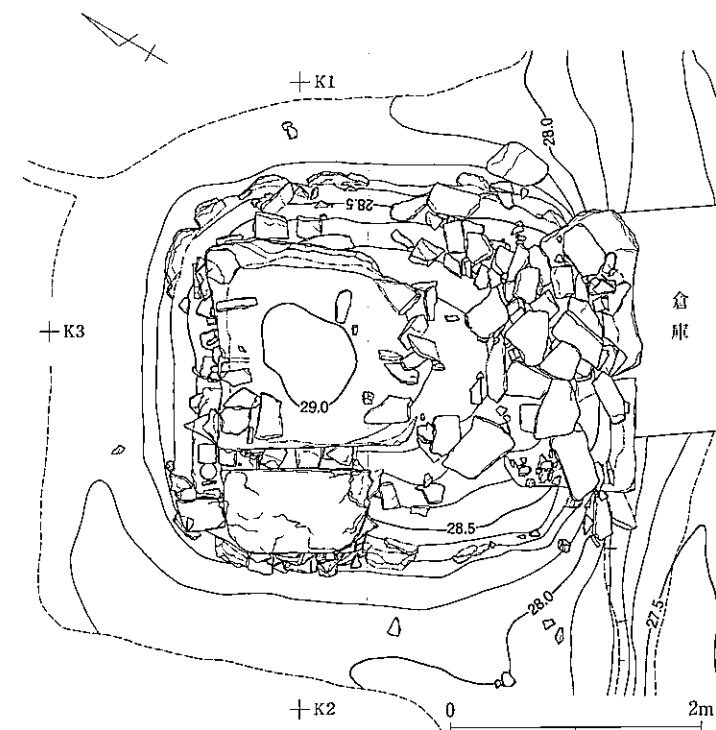
第19図 測量調査風景（第3次調査）



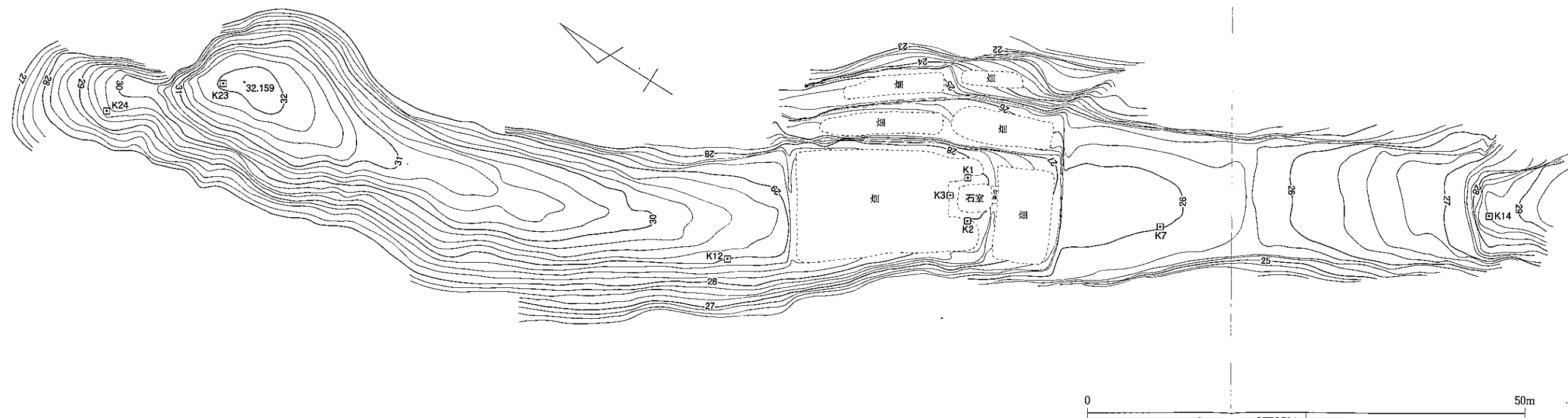
第20図 測量調査風景（第4次調査）



桐ノ木尾ばね古墳周辺地形



石室実測図 (三好編2007を一部改変)



第21図 桐ノ木尾ばね古墳周辺地形測量図

四 まとめ

1. 古墳立地からみた桐ノ木尾ばね古墳の性格

今回の調査では桐ノ木尾ばね古墳周辺地形の測量調査を行った。測量調査の結果、桐ノ木尾ばね古墳はこれまで丘陵頂部に築造されているとされてきたが、実際は丘陵の鞍部に築造されていたことが明らかとなった。また丘陵の最高点付近は石室が残存する場所よりも眺望が良く、立地としては千崎9・10号墳に近いが、この場所に古墳が存在した可能性は低い。

調査成果

このように桐ノ木尾ばね古墳は丘陵鞍部に築造されているのだが、このことは丘陵上に古墳を築造する際に最も眺望のよい場所が選地されたわけではないということを示している。たしかに天草地域には眺望が良く互いを見渡すことができるような位置に長砂連古墳や大戸鼻古墳群、広浦古墳といった装飾古墳や畿内政権との関連が考えられる古墳が築造されている。古墳築造、特に前方後円墳の築造においては、政治的モニュメントとして高い丘や海上交通の要衝が選ばれたことが指摘されている（都出1989）。このように考えるとこれらの古墳は海上交通を意識して築造されたものと考えられる。また他地域の古墳立地の変遷を見ると、吉備地域においては中期前半を境に立地の様相が変化し、古墳の性格が祭祀性に基づくものから政治的な表象へと変容したことが指摘されている。このような変化は讃岐や播磨においても指摘できるという（宇垣2004）。天草地域においては前方後円墳が存在せず、前期古墳や古墳時代集落の様相が明らかでないという問題はあるが、中期前半に築造された桐ノ木尾ばね古墳が丘陵頂部ではなく丘陵鞍部に築造されている状況は、他地域にみられる中期前半の変革と連動しているものと思われる。さらに近隣の千崎5号墳は丘陵鞍部に築造されているが、これは古墳群の形成順序によるものと考えられ、先行する千崎10号墳が丘陵頂部に築かれていることから、千崎古墳群における古墳築造はまず丘陵頂部から行われた可能性がある。この点、桐ノ木尾ばね古墳は単独で築造されており、選地の段階から千崎古墳群とは異なった意識が働いていた可能性が高いと思われる。これは埋葬施設に熊本県地域では特異な石棺系石室が採用されている点からも指摘することができる。これらのことから桐ノ木尾ばね古墳は天草地域における古墳築造において他の古墳とは異なる性格を有していたものと思われる。

古墳立地

古墳の性格

2. 熊本県地域の古墳築造動向からみた桐ノ木尾ばね古墳

桐ノ木尾ばね古墳はその立地から天草地域における古墳の中でも特異な面が見られることを指摘した。ここで桐ノ木尾ばね古墳の性格を熊本県地域の古墳築造動向から考えてみたい。

熊本県地域の古墳築造については集成編年5～6期（広瀬1992）における首長系譜の断絶を経て、集成編年7期に複数地域で齊一的に首長墓が築造されるようになる（木村2007）。首長系譜の断絶期には宇土半島基部地域でも前方後円墳の築造がみられず、この時期は前期を通じて前方後円墳が築造された当地域における古墳築造の優位性が揺らぎ始めた時期とみることができる。またこのことは宇土半島基部地域を中心とした地域間関係が変動したことを示唆している。桐ノ木尾ばね古墳は首長系譜の断絶期であり地域間関係の変革期に築造されており、古墳の立地や石室形態は維和島周辺では特異である。このような桐ノ木尾ばね古墳の性格から、共通する石棺加工技術にみられる千崎古墳群と宇土半島基部地域の関連性（杉井2007）とは異なる形の地域間関係が形成されていた可能性も今後検討されるべきであろう。（南）

熊本県地域の古墳築造動向

他地域との地域間関係

参考文献

- 宇垣匡雅 2004 「古墳の立地とはなにか」『古墳時代の政治構造』 青木書店：pp. 157-173
- 木村龍生 2007 「中九州における中期古墳の編年」『九州島における中期古墳の再検討』 九州前方後円墳研究会：pp. 161-183
- 杉井 健 2007 「古墳時代の大矢野」『上天草いにしへの暮らしと古墳』 上天草市史大矢野町編 1 熊本県上天草市：pp. 123-345
- 田辺哲夫 1955 「天草郡大矢野町維和古墳群調査概要」 熊本県立玉名高等学校
- 都出比呂志 1989 「古墳が造られた時代」『古代史復元 6 古墳時代の王と民衆』 講談社：P. 9
- 中橋孝博 2006 「熊本県上天草市維和島・桐ノ木尾ばね古墳出土の古墳時代人骨」『上天草市史大矢野町編資料集』 2：pp. 94-97
- 広瀬和雄 1992 「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成 近畿編』 山川出版社：pp. 24-26
- 三好栄太郎編 2007 「桐ノ木尾ばね古墳実測調査報告」『上天草市史大矢野町編資料集』 3 上天草市：pp. 37-54
- 三好栄太郎・仙波靖子編 2007 「千崎古墳群第5次調査報告」『上天草市史大矢野町編資料集』 3 上天草市：pp. 1-36
- 山野ケン陽次郎・有馬絢子編 2008 「千崎古墳群第6次調査報告」『考古学研究室報告』 第43集 熊本大学文学部考古学研究室：pp. 1-36

挿図出典

- 第21図上段右 三好栄太郎編 2007 「桐ノ木尾ばね古墳実測調査報告」『上天草市史大矢野町編資料集』 3 上天草市：P49
第33図を一部改変